

---

# エキセントリック連続ワールド

かようにしたか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エキセントリック連続ワールド

### 【Nコード】

N8551K

### 【作者名】

かようにしたか

### 【あらすじ】

5つの物語が交錯する予測不可能物語です。

## ハッピーバースデー

草食系男子。実にけしからん。たださえ、弱い男達が開き直って弱くとも気にしていない。

むしろ、気の弱さを売りにしているところがある。腑甲斐ないことだ。男は多少、強引でこそ存在理由があるというものだ。

「お誕生日おめでとうございます」

ある日、私の部屋にそんな置き手紙が残っていた。いったい、誰がこんなものを置いて行ったのだろう？

もちろん、部屋には鍵をかけていた。私以外でこの部屋の鍵を持っているのは大家さんしかいない。

が、その大家さんとも親しい間柄ではない。

——誰かが無断で部屋の鍵をコピーしたのか？——いやいや、そんな無邪気な友人を私は持ちあわせてはいない。

私は、この手紙の主に全く心当たりがない自分が情けなかった。

このような手紙の一通や二通、いい年した社会人なら心当たり過ぎて余計に誰かわからんという事態に陥っても良いではないか。

全くもって自分がけしからん。このままでは、やたら気になるだけで何の行動も起こせやしないではないか。

「あの、お誕生日おめでとつございます」

突如、背後から声がする。「なんだ、君だったのか」

私の後ろには、自殺してしまった部下が半透明で立って、いや、浮かんでいた。

「元気そうじゃないか。なんだ、つつ立って。まあ、座りなさい。今日は私を呪い殺しにでも？」

「いえいえ、僕は琴美さんの誕生日が祝いたくて」

私はこの青年に希望を見いだしていた。将来必ず、会社になくてもならない存在になるだろう。そう信じていたのだ。

しかし、少し厳し過ぎたのか？青年は、何も言わずに自殺してしまった。

「私を恨んでいるのではないのかね？」「いえ、恨んでいるなんてそんな。感謝しかしていませんよ」

私がそうかとつぶやくと、二人とも何も話せなくなり、長い沈黙が訪れた。話したいことはたくさんあったはずなのに何も出てこない。

「あ、あの僕」「どうした？何でも言ってくれ」

またしても長い沈黙。そろそろ机を引つ繰り返してやるのかと思つたその時、青年は再び口を開く。

「僕は部長。いえ、琴美さんのことが好きでした。単なる憧れだと自分でも言い聞かせていました。もちろん、憧れは今でもあります。でも、それだけじゃなかったんです」

「な、何を今さら言っているのかね？やめないか、君」私が柄にもなく動揺している。心臓の鼓動がどんどん早くなっていく。

彼が力強く一步、私に近づいた。こんな彼の表情を見るのは初めてだ。

「いえ、言わせてください。琴美さんのその変わった話し方。その美しさとのギャップから、もう目が離せなかったんです。一度はあきらめました。でも、こうして想いだけでも伝えたくて今日はやってまいりました」

私は、彼の言葉を聞いてなぜか震える手を押さえ付けた。

聞かなくてはならないことがある。「どうして諦めたんだね？この私を」

彼の言葉にはもう迷いはなかった。「部長はレズだと言う噂を聞いたんです。それがあまりにもショックで」「それで、自殺したというわけか？」

男が弱すぎたのか、私が強すぎたのか。何をどうすれば良かったのか？

やるせない。わけのわからぬ感情が私に沸き上がり、気付けば怒鳴っていた。

「バカ者がっ。なぜ私に事実を確認しようとしない？どうして、おまえはいつも勝手に傷ついていくのだ」

もう時間は取り返せない。これが仕事なら、すぐさまフォローもしてやれるのに。なぜか、何も解決策が出てこない。

「どうして？どうして、自ら命を断つようなことを？」

体から力が抜けていく。私はそれ以上、立っていることはできなくなっていた。

「おまえが。おまえがそれでは、手も握れんではないか」

顔を上げると、ぼんやりと見える彼が微笑んだような気がした。

## ダブルデ

笑えるほどの不幸ってありますか？それって不幸だと思いますか？

それは笑った時点で不幸ではなくなるのではないしょうか？

笑って、浄化されて、幸せとなる。もし、そうであるならば笑っていれば幸せなのです。

とても簡単そうですが、実際には難しいことなのかもしれません。

今、僕はストーカーのような女に付きまといまわっています。最初は迷惑でも、少し嬉しかった。

しかし、彼女が嘘をつき、無言電話をし、刃物を持ち歩いていたりするうちに僕の心は時速二百？を超える——東京、大阪間なら一時間と少しぐらいで到着するであろう——スピードで離れていきました。

僕は度重なる彼女のご好意に、精神的疲労を積み重ねていくだけです。

彼女の右目の下には、印象的なほくろがありました。ですから、似たようなほくろを見ると別の人でも恐怖せずにはいられませんでした。何度も夢に出てきては、うなされもしました。

それほどの恐怖とストレス。僕の頬は痩せこけ、目は落ちくぼみ、顔にある種の迫力が増していく。

あまりにも毎日、顔が変わるので鏡を見るのが少し楽しみになっていたほどです。

そんな日が一週間ほど続いたある日のこと。

僕は、とある計画を実行するためアイスクリーム屋に向かっていた。アイスクリームが、食べたかったものではありません。

あまりに自分の顔が恐ろしいので、どうしてもこれを披露してやりたくなったのです。

カップルなどの若者どもが集う場所で一際異彩を放つ男が、血走った目でアイスクリームを選んでいる。

そして、ふところに忍ばせた携帯のアラームを使い、恐怖映画のテーマ曲を流すのです。

なんてエキセントリックなのでしょう。私は謎の男として、そこにいる人々の記憶に残ることとなるのです。考えるだけで、自然に笑みがこぼれてまいります。

しかし、残念なことに、これは企画だけに終わってしまうのです。

なぜなら、私は自分に遭遇したのです。しかも、ナイフで脅されお金を要求されました。

自分に脅されるというのも乙なものです。なぜか、僕とは利き手が左右逆というだけで外見はほぼ同じなのです。

私が私の名前を呼び、相手の要求もなぜだかわかってしまう。状況とは裏腹に心は通じ合っていたのです。

彼は私を殺すという使命を持っていました。しかし、殺すのにはためらいがあったようなのです。

なぜ殺さなければいけないのか？自分はなぜ存在しているのか？と苦悩していたのです。

私は彼に生きがいを感じてもらったために二通の手紙を書きました。

一通は、もう一人の私へ。もう一通はストーカーの女へ。それぞれに映画のチケットを同封して、ポストに投函したのです。

それは思った以上にうまくいきました。彼は彼女に生きがいを見いだし、彼女の狂気は愛されることで消え去りました。

しかし、私は忘れ去られました。

あれだけ疎ましく思っていた彼女の行動が今では恋しいのです。その想いは日に日に増していくばかりです。

ついには、自分を差し置いて幸せになったもう一人の自分を憎むようになったのです。

——そうだ。あいつを殺して俺が入れ代われば……。あいつだって、いつ俺を殺しに来るのかわからない。このまま、殺されて忘れ去られるなんて我慢できるか——

僕は手に入れた拳銃を握りしめ、綿密な計画を立てました。そして、いよいよ決行の日。

僕が玄関のドアに手をかけようとすると先にドアが開きます。そこには、ストーカー女が立っていたのです。

「もう一人のあなたは、もう土の下で眠っているわ。さあ、映画館にでも行きましょう」

彼女はそう言っ、僕の右腕を引っ張ります。

「君が殺したのか？どうして？」

「もちろん、あなたのためよ。もう、何も心配いらないわ」

そう言いながら、彼女は振り返ります。僕は彼女の左目の下に、ほくろがあるのを見ていました。

——もう、逃げられないな——

そう思うと何だか可笑しくなってきた、僕にはただ笑うしかありませんでした。

## 不便な安心

僕は一年の留学から日本に帰って来た。英語はだいぶわかるようにはなったし、イギリスでの友達もできた。

ただ一つ、心配だったのは僕の *girl friend* (彼女) だった。メールや電話での連絡は欠かさなかったのだけど、一年もの間、会えなかったのだ。さぞ、寂しい思いをしていたに違いない。

僕は空港から直接、彼女の家に向かった。

「おかえり。どうだった？」

彼女は僕のために和食を用意して待っていてくれた。

「ああ、やっぱりご飯は和食に限るよ。一回パーティーでみんなにちらし寿司を作って食べたんだけどね。あれ以来だな」

僕が話を延々と続けていると彼女はあくびをし始めた。いつのまにか、十二時を過ぎていたのだ。

「そろそろ寝ようか？明日はアルバイトがあるって言ってたよね？」

僕は驚いた。二人でベッドへ横たわると、ほぼ同時に彼女は眠りについてしまったのだ。

僕は時差ぼけで目がさえてしまっている。しかも、久しぶりの再会

に淡い期待も抱いていたのだ。まさか、先に寝てしまうなんて思いもよらなかった。

一応、迷ってみたのだが僕は彼女を起こしてしまうことにした。こればかりは仕方がない。僕は草食系男子などではないのだ。

ゆっくりと彼女へ手を伸ばしたその時、空中に文字が表示される。

「ログインパスワードを入力してください」

すっかり忘れていた。浮気防止プログラム。痴漢対策にもなるので、今ではほとんどの女性がこれを身につけている。

僕はパスワードを何度も入力しようとする。三度目のミスでロックがかかってしまう。二時間はパスワードを入れることすら出来なくなるのだ。

ようやく二時間が経ち、再挑戦しようとするとう端の方に「パスワードを忘れた方へ」という表示がしてあるのに気付いた。

そういえば、そんな救済措置があったのだ。押してみると、表示が変わる。

「二人で初めて行ったデートは？」

僕はパスワード入力するのをあきらめた。

## 愛で克服

“愛があれば、何でも乗り越えることができる”

陳腐で風化したような言葉だ。だが、嘘ではない。

自分だけでは、どうにもならないことができてしまう。これは奇跡でも何でもない。ただ、がむしゃらな行動をしているうちに結果がついてくる。それだけの話なのだ。

戦争でさえ、止めてしまうほどの力を発揮することもある。

僕はこれを我が身で体験した。

数年前。僕は長い間、生死をさまよっていた。

しかし、奇跡と言ったべきなのか？僕はわずか約一ヵ月で元通りに回復することができたのである。

その間、僕の身の回りの世話をしてくれたのが彼女だった。

「私、ターニャ。あなた、見つけた。ぶ倒れてた。大変だだよ。みんな、大騒ぎ」

僕の座る車椅子を押しながら、彼女が話している。僕の回復は自分でもわかるぐらいに早い。もうすぐ、自分で歩けるようになるだろう。

久しぶりの外出は、やはり気分がいい。僕は立ち上がって、遠くで農作業をしている人たちに声をかける。

「こんにちわー。どんな野菜ができるんですか？」見たところ、人参のようだった。しかし、農家の人たちはおびえた様子で返事もできずにいる。

「あなた、邪魔をしたは駄目だよ。すごく忙しいの人たちでしょう？」

僕はターニヤを始め、ここの言葉を一つも理解することができなかったのだ。もちろん、話すこともできない。しかし、ターニヤは僕の言葉をすごい早さで習得していく。

簡単な会話ができるようになるまで一週間もかからなかったのだ。彼女には語学の才能があるに違いない。

「私、すごく心配。あなたのウチュセン持て行かれちまたよ」

宇宙船？そうだ。僕は宇宙を一人で旅をしていたのだ。おそらく、整備不良だったのだろう。燃料漏れしてしまった宇宙船でさまよっているところに運良く、この星を見つけたのだ。

「困ったな。惑星携帯電話もあの中に置きっ放しだよ。この星にはないものもたくさん積んであるから、プレゼントしたいのになあ。そうだ。僕の船の中でも人参を作っているんだよ」

ターニヤは聞いていなかった。彼女は僕の食事代わりの錠剤とスープを取りに行っていた。そろそろ、まともな食事が恋しい。

まだ、病み上がりで文句は言える身分じゃないのはわかっている。焦る気持ちを押さえて、彼女からスープを受け取る。

自分で食事をとれるようになった僕を見ながら、彼女が嬉しそうに言う。

「もうこの星に住んだら良ろし。私、あなたが好き好きだよ」

スープのことなど、お構いなしに彼女が僕に抱きついた。

僕たちはいとも簡単に恋に落ちた。しかし、それは許されることはなかったのだ。

「私のコンニャクシャ、ちんぷんかんぷんね。すごく怒てるよ。でも、私あの人、嫌い嫌い」

彼女には婚約者がいたのだ。そうでなくとも、他の星の人間と結婚するなんて前例がないらしい。

そんなことをターニヤの両親が許すわけがない。先のことを考えると、僕はターニヤを不幸にしてしまうかもしれないのだ。

身が切り裂かれる想いだった。しかし、僕がはつきり告げるべきだ。

「ターニヤ、僕は帰らなくてはならない。君はこの星で家族と生きていた方が幸せなんだよ」

何も言わずにぼろぼろ泣き始めるターニヤをまともに見ることはできなかった。

しかし、これ以上ここに居るわけにはいかない。

「ターニヤ、僕にはあの船が必要なんだ。どこに置いてあるのか調べてもらえないか？」

彼女は泣いたまま、二回うなずくと部屋から出て行ってしまった。

僕の決心をためらわせるほどに、彼女は優秀だった。

二日経ったその日には、宇宙船の場所をつきとめ、燃料の代わりになるものも用意してしてくれたのだ。修理を手伝ってくれる技術者まで連れて来てくれるらしい。

燃料も技術者もタダではないだろう。自分の星に帰ってしまう僕に何の見返りも求めずにここまでやってくれたのだ。

——僕は彼女に何ができる？——

僕と結婚できなくてもいい。せめて、彼女の嫌がつている結婚だけでも考え直してもらえないだろうか？

僕は彼女の父親を訪ねることにした。

「娘はもう正気ではないのだ。おまえさえ死ねば、娘は元に戻ってくれる」

権力者であつた彼女の父親に僕はあつさり捕らえられて、すぐ処刑されることになってしまった。

——これも運命か——

覚悟を決めた僕の前には畑で見た人参もどきが置かれていた。

「さあ、食べ。おまえごときが残さず食べられるとは思わんがな」

これは人参ではなく、毒物だったのか？まあ、処刑方法が何であろうとターニヤと別れること以上の苦痛はない。

僕は目の前の人参もどきをかじった。味は普通の人参だ。

「待ってくださいよ、あなた。私もイシヨに食べるがいいよ」

ターニヤが突然人参をかじりながら、現れる。慌てふためく彼女の両親。しかし、あれでターニヤが死ぬわけがない。彼女がかじったのは、僕の宇宙船で栽培していた人参なのだから。

——僕は本当に彼女に愛されていたんだな——

彼女の僕に対する想いを目のあたりにしながら死に行くことができる。悪くない人生だった。

パニックになる両親とその部下を見ると、ターニヤがいかに愛されているのかがわかる。最後に素晴らしい恋人を持つことができたのだ。もう悔いはない。

僕はゆっくりと目を閉じる。

——死なない？——

ターニヤが僕に近寄って来る。

「私たち、みんなの嫌いなもの食べてもショック死なかたね。おとーさん、もう好きにしてと言てるよ。良かた良かたね」

この時の僕の無表情が銅像になるのは、これから約五年後のことだった。

## 誕生日の後

私は放電こそが愛情なのではないか？と思う。

何かをしてもらっただけで愛などと言うのは片腹痛い。

充電してもらっておいで使わない心など何の役に立つと言うのだ？

心は使えば使うほど、強くなる。そこに愛情が生まれてくるのである。

私は元部下を叱りつけていた。

「何たることだ。君、この責任はどうとってくれるのかね？」

「琴美さん、もういいじゃありませんか。僕はあなたと一緒にいたいんだ。二人でのんびり暮らしていきましょうよ」

「何を言っておるのだ？私にはまだ、やらなければならないことがある。君、離れたまえ」

私は、このシミズと言う男に愛されている。一度は受け入れようとしたのだが、それがあまかった。

会社もない、このような場所に連れて来られて私にどうしろと言うのだ？

いくら、腹が減らないからと言われても仕事ができないのが苦痛で

仕方がないのだ。

「お嬢さん、助太刀いたそう」

誰？と思う間もなかった。ぶつぶつ言いながら、老人が手をかざす。彼の手から、光があふれ出したかと思うとシミズはいなくなってしまうのだ。

——やりすぎなのでは？——

言い争いをしていたのは事実だが、私の元部下だ。跡形もなく消し去ってしまうのはどうかと思う。

ただちにクレームをかけようと老人に歩み寄ると、彼は言う。

「悪霊じゃよ、あれは」

——近づいてはいけない人だったか？——

何を言いだすかと思えば、悪霊だと？私の部下に限って、そんなはずはない。ちよつと、お茶目をしただけではないか。

「おぬし、自分の状況が把握できたらんようじゃの」

「変わったことをおっしやるご老人だ。しかし、何を言おうと私の部下を消したのは事実。次は法廷でお会いいたしましょう。覚悟なさるがいい」

「待ちなされ。あの男はまだちゃんとどこかにおるわい。だいたい法廷など、この世界のどこにもありやせんよ」

どこかにシミズがいるのなら探さなきゃならない。私は老人の話で足を止めてはいたが、再び歩こうとした。

「待ちなさいと言っておるだろう。せつかちなお嬢さんじゃの。おぬし、この世界から出たいのじゃろ？」

私は振り返って、老人をまじまじと観察する。神道なのだろうか？

衣を着てはいるのだが、ショッキングピンクなのだ。初めて見た時に「ふざけるな」と言おうとしてタイミングを逸していたのだ。

——駄目だ。いまいち信じがたい——

何も言わずに再び立ち去ろうとした時だ。私はとんでもない事実を聞かされる。

「シミズじゃったかな？あやつがおぬしをここへ連れて来たのは会社のためなのじゃ。おぬしのことが好きでここへ連れて来たのではない」

「ふざけているのは格好だけにしておきたまえ、ご老人。何を証拠にそんなことを言っているのかね？」

「証拠なら、たくさんあるわい。まず道理が通っておらん。好かれていたのなら、それを裏切った形で怨念となる。シミズはおぬしがレズかもしれないと知っただけじゃ」

「それはシミズの中で裏切りに値するのではないのかね？」

「おぬしが直接シミズを裏切ったわけではあるまい。怨念と言うには、理由が浅いとは思わんかの？」

確かにそれは少し気になっていたところだ。彼は理由のない嫉妬に狂うタイプではない。冷静で、調和を重んじるタイプなのだ。

——好きだと言われて、私は舞い上がっていたのか？——

何たる不覚。一番状況が飲み込めていなかったのは、この私だったのだ。

しかし、シミズが会社のために私をここへ連れて来たというのはどういうことだ？

私が生計にとってマイナスだというのは？しかも、私をここへ連れて来れるほどの怨念を持つほどに。

実にけしからん。許しがたい。彼がどう考えていようが、私は会社

に戻らなくてはならないのだ。

「で、どうすればこの世界から抜け出せるのかね、ご老人？」

老人はなぜか背中を向ける。

「ワシの修業は厳しいぞ？おぬしについて来る自信がお有りかな？」

その背中には大きな文字で“愛”と書かれていたが、見ていないことにした。

ここを出る方法さえ聞き出せばいいのだ。余計なことは聞かず、最短で調子を合わせていれば良い。

「はい。覚悟はできております。何卒、よろしくお願いいたします」

「さすがは部長じゃ。礼儀に関しては問題なかるう。これから、おぬしが為すべきことを先に言っておこう」

もう何でもいい。帰れさえすれば良いのだ。

「はい。よろしくご教授願います」

「シミズの悪霊を惚れさせるのじゃ。これすなわち、恋愛道なり！」

——あ、そうなんだ——

受け流せ、時間の無駄だ。すでに、私は考えるのを止めていたので

あ  
っ  
た。  
。

了

## ダークサイドの朝

——なぜ私は生まれてきたのだろうか？——

私の仕事は問題を解決することだ。特に報酬があるわけではないし、誰かに称賛されることもない。

“陽の私”に危機が訪れる前に“陰の私”が問題を排除する。

あなたにも身に覚えがあるだろう。物が知らない間に移動していることや、話し合いもしていないのに相手が納得していること。

それらは我々が“陽のあなた達”のために働いたためなのだ。優秀な陰であるほど、あなた達には気付かれてはいない。

皮肉なことだ。優秀であるほど、気付かれない。関心を持たれるきっかけさえ、与えられることもない。一体、誰にそれを誇ると言うのだ。

私は決して優秀などではない。“陽の私”に直接対面したこともあ

る。

陽の奴を殺してみようかとも思ったが、辞めておいた。興味本位で人を殺すものではない。

おかげで“陰である私”が“陽の女”を妻にすることになった。

規定とは順番が逆になるのだが、仕方がない。私は“陰である女”を“陽である私”に引き取らせたのである。

とある手段を用いて。

ここまでいい。しかし、この規定通りではない、この入れ代わりが私たちの生活を狂わせるようになったのだ。

我々は陰でありながら、陽の思考を読むことができる。職務からして当然の権限だ。

さらには、その思考をある程度コントロールできるのだが、陽にはそんなことができるわけがない。

それが私の妻だった。問題进行处理する側の世界で、起こるはずのな

い問題が起きる。

最初は小さな混乱だが、それは徐々に大きくなっていく。

当然、それが陽の世界に影響を及ぶと、連鎖的に問題は膨れ上がっていく。

我々を、誰かが助けてくれるわけもないのだ。

ぼんやりと抱いていた何かがはつきりと形となって現れるのに時間はかからなかった。

嫉み、不安、怒り。知ってはいたが経験したことはない。

「なぜ、優秀な我々の方が陰に甘んじている？こんなことが許されていいのか？」

こうして我々の反乱が始まったのである。

了

## デビル

思いやりって何だろう？

自分の子供でも叱るのは愛情なのだろうか？

「。。。をしてはいけません」

世間体と勝手な思い込みではないのか？なぜ、してはいけないのだろう？と叱る前に真剣に考えたことはあるのだろうか？

## デビル

まだ、生まれて三ヶ月の乳幼児が僕を見つめています。

「なあ、腹減ったよ。ミルク作ってくれよ」

僕たち夫婦は天使の子を育てていました。毎年、世界中で生まれるようになった生命体で“リトル”と呼ばれています。

「早くしろよ。腹減ってるって言うてるだろ？勘弁してくれよ」

お聞きの通り、性格は最悪でも知能は高いのです。

養育費は政府が全て負担しているので、子供のいない僕達のような夫婦が申請して育てることが多いと聞きます。

「おいおい、返事ぐらいしろよ。人間としてどうなんだよ。それとも、あれか。おいらなんか返事する必要はないってか？」

「そんなことないよ、晴十郎。ごめんな、ちょっと考え事をしていたんだ。すぐに作るから、ちょっと待っていてくれるかな？」

誰もがこのリトルに怒ることはできません。叱ったが最後、死んでしまうからなのです。ハートが物凄く弱い生き物で、たぶん一睨みしただけでも死んでしまうのです。

世界記録でも三歳と九ヶ月。原因不明の衰弱死も多いようです。

ストレスにも弱いのでしょう。リトルの暴言にただ耐え、心の中で言い返していても彼らは敏感に察知するのです。

「晴十郎ちゃん、ただいま。あらあ、ミルク飲んでるの？えらいわねえ」

妻が帰って来るなり晴十郎を抱き抱え、頬を寄せます。

彼の表情は倒産寸前の社長の如く、かなり険しい顔でしたが、なぜか心底嫌がっているようには見えません。

元々、リトルを引き取ると言い出したのは、この僕の妻です。

正直、僕には妻がリトルを育てられるとは思いませんでした。

彼女はいつもふさぎ込みがちでした。体が弱く、口を開けば愚痴ばかりで、今の姿など全く想像できなかったのですから。

だから、僕は妻が晴十郎と名付けたリトルに感謝しているのです。いくら口が悪くとも腹は立ちません。

妻はリトルの扱いが本当に上手でした。

「はい。晴十郎ちゃん、ママに笑顔を見せてちょうだい」

「もう、いいじゃねえか。なんで、毎日笑顔にならなきゃいけないんだよ。意味わかんねえよ」

リトルは何で死ぬのかわかりません。普通はここで遠慮しがちなのですが、妻は一步も引きません。

「晴十郎が笑顔になると、パパもママも幸せになるの。あなたには、周りを幸せにする子になって欲しいのよ」

そうやって、晴十郎はぎこちない笑顔を見せるのです。その後、決まって妻は大喜びで彼を抱き締めるのでした。

晴十郎はその後もすくすくと育ち、僕たち夫婦を幸せにしてくれました。

世界最長記録も優に越え、今では五歳。その頃の晴十郎もいちじるしい成長を見せていました。

当然、世界も私たちを注目しはじめます。とは言っても、リトルの性質上、取材は法律で禁じられています。

一応、父親が公式の場で発表するだけ、となっているのです。

そこでは、リトルをうまく育てるコツについて質問されます。しかし、全世界が注目する中、私はうまく答えられなかったのです。

あれは緊張だったのでしょうか？何度も練習したのですが、何も答えられませんでした。

問題はそれから始まったのです。

おそらく、マスコミが賞金でも出したのでしょうか。法律があると言っても大した刑罰ではありません。

罰を受けるとしてもお釣りの方が大きいのです。

ありとあらゆる手段で私たちは見張られるようになりました。

携帯電話すら電源を入れた瞬間からかかってくるので使えなくなりました。

妻が外出できなくなりました。

窓はおろか、カーテンも開けられなくなりました。

賞金のためか、誰も助けてくれなくなりました。

妻はそれでも晴十郎を守るため、何も起こっていないかのように振る舞っていました。

私も何度か取材を受け、しっかりと答えたのです。それでも、マスコミはいなくなりません。

妻も何度か無理して、取材に出かけました。それでも、マスコミは帰ってくれそうにはありません。

人数は減るどころか、増えています。一度、視聴率や出版部数が伸びて味をしめたのでしょうか。

ついには機動隊が出動する騒ぎになりました。警察が動くのが、もう少し早ければ良かったのかもしれませんが。

騒ぎはさらに大きくなっていきます。拡声器で怒鳴る声が響く中、僕が最も心配していたことが起こります。

ついに妻が倒れてしまったのです。

すぐに救急車を呼びました。しかし、外には大勢の野次馬とマスコミ。救急車がここまで来れるわけがありません。

「パパ、ママが病気なのは外の奴らが悪いんだよな？」

晴十郎もいつも以上にイライラし始めました。この上、この子に死なれでもしたら妻に会わせる顔がありません。

「悪いかなんてわからないよ。彼らも色々な事情があるんだ。ただね……」

「おい、どうしたんだよ。パパ？」

僕は久しぶりの怒りで全身が震え、髪が伸び、爪が鋭さを増し、角が生えました。

「愛する人を守るのに良いも悪いもないんだよ。誰かの都合で作られたルールに縛られる必要はないしね」

僕は玄関の扉に手をかけ、振り返ります。晴十郎は手を握りしめ、こちらを見つめていました。

僕はそっと彼の頭をなで、両肩に手を置いて言います。

「お前だけが頼りなんだ。晴十郎、ママを頼んだよ」  
僕は息子の視線を感じながら、家の外へと歩き出したのでした。

了

## 別れさせ屋

ハイイ、元気かい？今日は悪い癖を辞める方法を伝授しようか。

実は簡単なことなんだ。例えば、貧乏ゆすり。これを止めてみよう。まず、貧乏ゆすりをしていた状況を思い浮べる。自分が貧乏ゆすりしているところを映像として頭の中で再生するんだ。

それを静かに座っている自分の映像と入れ替える。二回目からは、それだけを何度もイメージする。

もう、貧乏ゆすりは出来るだけ思い浮べない。たまに出て来てしまったとしても、「ああ、もう止めたんだ」と流してしまう。

大事なのは「これはしない」と強く思わないことなんだ。その代わりに「これをする」と強くイメージする。

これはT・ガルウェイ著「インナー・ゲーム」に載っている基礎中の基礎だ。

スポーツ選手がやっているイメージトレーニング、催眠術、OJT。全てに応用が効く。もちろん、恋愛にもね。

「これをするな」と言えば、大人でもやってしまうものなのだよ。

“ピンクの象”を想像すると言われて、誰ができると言うんだい？

——別れさせ屋——

すがすがしい朝に軽快に走るこの僕。嗚呼、なんてさわやかなんだ。

もし女性が歩いていたら、僕に恋の一つや二つはしていただろうね。お気の毒様。

めんどくさそうな奴が出てきたなと思ったね、その君。いいかい？

恋はいつだって唐突に訪れる。恋の終着駅に向かって追突するのはモノレール。それに気付かないで追いかけていると通報をされる。野球を欧米の言葉で言うと、ベースボール。

つまりはそういうことなんだ。わかってくれるね？

さて、僕のお仕事を紹介しておこう。別れさせ屋さ。

カップル仲介所が増えたおかげで、付き合ったことを後悔するカッ

ブルが急増してしまっているんだ。

もちろん、浮気している男性をうまく別れさせて欲しいって依頼もあるけどね。

なかなかハードな仕事だよ。コンピュータと違って人間に行動をプログラムするのは手間暇かかるんだ。

「おい、その紙より薄っぺらい男。用意はできたのか？」

この僕に話しかけた、一見恐そうなお姉さんは言うなればライバルカップル仲介所の野咲さんさ。僕はワイルドフラワーって呼んでいるんだ。

そう呼んで、一度も返事してもらったことはないけどね。彼女はちよっとシャイなのさ。

「私は準備万端だ。さっさと始めるぞ」

「ちよっと待ちなよ、ワイルドフラワー。この午後のティータイムがまだ終わってないんだ。君も一緒にどうだい？」

これから、あるカップルの存在意義について戦いが始まる。

僕が勝てば、僕が別れさせる。ワイルドフラワーが勝てば、カップルの仲は彼らが修復するというわけさ。

「私がすぐに始めたいと言っているのだ。早く準備に取りかかりなさい」

「僕のティータイムを邪魔する者はいくら君でも許さないよ。座りたまえ」

普段は滅多に怒ることのない僕だけど、これだけは譲れない。驚いたワイルドフラワーは何も言えずに座っていた。

「驚かせて悪かったね。あ、その君。このレディにもアールグレイを持って来てもらえるかな？」

紅茶が来るのを待つ間、僕は音声レコーダーをおもむろに取り出しスイッチを入れる。

「被害者のガールのことなんだけどね。一年も待たされると言うのは、とても辛いことだと思うんだ。ボーイは、それがわかってた上で留学に行ったのかな？」

ワイルドフラワーが意地悪そうな顔をして、こちらを見ている。

また一人のレディに恋が芽生えてしまったかと思っただけ、そうじやなかった。

「あなた、ティータイムはどうしたの？沈黙に耐えなかった？それとも、指図されるのがお嫌いだったかしら？」

へびに睨まれたカエルって、こんな気持ちなんだね。なんだか、ぞくぞくするよ。

「これぐらいの居心地の悪さがちょうど良かったんだ。君、素晴らしい空気を出すね」

返事はない。彼女はただ、モナリザスマイルでこちらを見ているだけだ。

「どうも、ありがとう」

彼女に紅茶が届いたのだ。ウェイトレスにはとても優しい笑顔を見せている。ウェイトレスが少し頬を赤らめ去って行く。

「まあ、いいわ。始めましょう」

僕の頭の中で開始のファンファーレが鳴る。

「お手やわらかに」

「そちらの主張は“一年待たされた”でしたわね？男性が自分のキヤリアアップのために留学するのは彼女のためじゃないかしら？」

言い忘れていたんだけど、この話し合いはカップル審議と呼ばれている。

あるカップルがそれぞれ別れたい、別れたくないの依頼を出した時——つまり、別会社が逆の依頼を受けて、衝突が予想される場合にのみ——に開かれる話し合いだ。

要するに、どちらが仕事をするのかを決めるってわけだ。

審議は録音されたものを提出するだけ。愛の審議会が勝敗を決めると言っわけさ。

「で、そのボーイのキャリアとやらはアップしたのかな？この僕には、ただ遊びに行きたかっただけにしか見えないんだけどね」

「経験もキャリアのうちよ。異国の文化に触れるのはとても大事な  
ことじゃないかしら？」

「そうだね。とても大事なことだ。君の言う通りさ」

そう言った僕が黙ってしまつと、ワイルドフラワーは余裕の笑みを  
浮かべる。

「じゃあ、このカップルが別れる必要はないわね」

「そういうことじゃないのさ。君は知らないふりをしているね。ボ  
ーイは彼氏としての責任を果たせていないんだよ」

ワイルドフラワーがあからさまに動揺する。あまりに芝居がかり過  
ぎているので笑いそうになる。

「ボーイはログインパスワードすら覚えてなかったんだよ？一年待  
たせてしまったなら、真っ先に安心感を提供するのが彼氏としての  
勤めじゃないか？」

ワイルドフラワーはまた芝居つけたつぷりに驚いて見せる。

「驚いたわ。あなた、思ったよりもちゃんとしたことが言えるのね。正直、見直したわ」

「自分が何をすべきか、わかっていない男と付き合う方が可哀想だよ。ちゃんと別れさせてあげた方がいいんじゃないかな？」

しばらくの沈黙の後、僕とワイルドフラワーはお互いのレコーダーを取り出してストップボタンを押す。

彼女は急に悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「今日もすごく可笑しかったわ。あなたの笑いを堪える時の表情、最高にいいわよ」

「おいたが過ぎるよ、ワイルドフラワー。さて、ワインでも飲みに行こうか？」

ちなみに僕は、ボーイが帰国するよりも前にガールの父親から依頼を受けていた。

おかげで審議する前から色々と仕込む余裕はあったというわけだ。

作業員を送り込み、ボーイには余計なパスワードをたくさん覚えてもらった。古いパスワードを忘れてもらうためで、これも僕が組んだ罠の一つなのだ。

約2時間後、僕たちはワインバーで祝杯をあげていた。ほんのり酔ったワイルドフラワーが僕に寄り掛かる。

「私のパスワード、あなたに解けるかしら？」

ハッキングして、プログラムをし直すのは僕の得意技だ。困難ではあるけど、これほど楽しいことはないよね。

僕はワイルドフラワーに笑顔で答えた。

了

## 第一次ニンジン革命

ターニヤの父親が苦悩していた。

「パパーニヤ、戦争始まるかもしれない言てるね。でも、あいつは嫌い過ぎるだから結婚は厳しよ。どうしたらいいか、あなた？」

ターニヤの父、パパーニヤ（生まれた時から、この名前だったのか少し気になるところだ）は、ターニヤを政略結婚させようとしていた。

「ターニヤの結婚が破棄されることで、戦争となれば間違いなくこの国は滅びるだろう。我々が、あの強大な国ヒュージニアに勝つ術はないのだよ」

そうパパーニヤは言っていた。そこまで、重大な結婚を僕は止めてしまったのだ。

——僕がいなくなってしまうば——

そんなことまで考えてしまう。しかし、それでターニヤが不幸になるのは僕にとっても堪え難い。パパーニヤの覚悟まで踏みにじることもなくなってしまふ。

「ターニヤは、私たち夫婦の宝なのだ。君、明日の朝にでもターニヤを連れ去ってもらえないか？娘がいなくなれば、ヒュージニア国王もあきらめてくれるやもしれん」

その晩、僕はほとんど寝ることができなかった。ターニヤの両親とこの国の人達を犠牲にして、僕たちが幸せになれるのだろうか？

朝になっても何一つ、解決することはない。食欲はなかったが、家族での朝食だから僕は広間に向かっていた。

「食べて元気だすよ、あなた」

食べられるわけがない。この国の食料は全てヒュージニア国からの供給に頼っている。昨晚、パーニヤからそう聞いていたのだ。

——たとえば、一人分の食料でも残しておきたい——

ぼんやりと考えていると食事が運ばれて来る。

「今日はターニヤも全部食べるよ。久しぶりだよ」

何が？と思ったが、並べられた食事を見て納得した。

またしても、錠剤とスープだけだったのだ。僕は怪我をして寝たきりのようなものだったから、錠剤とスープだけなのだと思い込んでいた。

しかし、そうではなかったのだ。この国では、これが普通の食事だったのだ。生きるのに必要な栄養を全てこのスープと錠剤だけで摂っているのだろうか？

——そういえば、ターニヤが錠剤を口にしてるところを見たことがない——

「ターニヤ、君はなんでこっちの錠剤みたいなのは食べてなかったの？」

ターニヤがなぜか照れて、下を向いている。予想外の反応に僕は動揺する。女性には聞いてはいけないことを、よりによってご両親の前で聞いてしまったのか？

ターニヤの母、ママーニヤが代わりに答えてくれる。

「この子はダイエットしていたのですよ。そんなことしても体壊すだけだと止めたんですけどね。この錠剤を食べないとお腹がすいてしょうがないはずですから」

ママーニヤはそう言って笑っている。僕はその違和感にはつとずる。

——ターニヤは錠剤を食べなくても平気だったのだ。では、なぜ食べる必要がある？——

「ちょっと、この食事お借りします。ターニヤ、君は今日も錠剤は止めておいた方がいいかもしれない」

そう言うと、僕は自分の分の食事を持って立ち上がった。これを調べれば、何かが解決するような気がする。僕は、自分の宇宙船に急いだ。

僕の勘は的中した。あの錠剤には死なない程度の毒、そして満腹中枢を刺激する成分が含まれていたのだ。要するに、腹が減らないように毒を飲んでいたのだ。

しかし、含まれている毒だけで死ぬことはない。あの錠剤をたくさん食べたとしても死ぬことはないのだ。2、3日も食べなければ毒は体内からは消える。

——僕とターニヤは少なくとも2、3日はあの錠剤を口にしていなかった——

問題は人参だったのだ。人参に含まれる成分と、錠剤の毒が結合した時にだけ、初めて人を死に追いやるのだ。

戦争の兵器として、密かに栽培されていた人参はヒュージア国には効かない。効くのは、この国だけだったのだ。

僕はパパーニヤにかけあつた。

「この国で作っている人参の出荷先はヒュージアですね？そこでは人参が作れないのではないですか？」

パパーニヤは、僕をなだめるように笑う。

「よくは知らないが、作れないんじゃないかな？ヒュージアも食料をただでこの国に渡すわけにはいかないだろう？仕方なく人参と交換ということにしてくれているんだよ」

——これではつきりした。この国とヒュージアの立場は逆だったのだ——

「お父様、僕とターニャはここに残って戦います」

この言葉が第一次人參革命の始まりとして、学校の教科書に載るのは4年後のことだった。

了

## 恋愛道の達人

私は大きな勘違いをしていた。

人を動かすのは支配する力ではない。

リーダーがチーム全員を完全にコントロールできる。予想外のことなど、何も起きない。そんなことは有り得ないのだ。

どう考えたとしても不可能だ。指示するのが一人だとしても、思い通りには動いてくれることはない。

あなたのパートナーを思い浮べれば、わかってもらえるだろう。

たとえば、指示した通り動いてくれたとしても、それが何になると言うのだ？

相手に不満を残すことが自分の幸せにつながるのだろうか？

私はそれが何もわかってはいなかったのだ。

「ふおつふおつふおつ、まだ誰も帰って来ておらん。おぬし、本当に部長だったのかえ？」

「私は小学校で先生をしていたわけではないだよ。あんな子供らが言うことを聞くわけがなからう？」

私は5人の子供たちに、別々の場所へおつかいを頼んでいた。自称恋愛道の師匠である想雲が、私に課した任務なのだ。

「言うことを聞かんと申すか？こりゃいかんわい。おまえさんが現世に帰れるのは当分先のことになるやもしれんのう」

私はわけあって、死後の世界に連れて来られてしまった。なぜだかわからないが、私が帰るにはこの修業を受けるのが一番の早道だとこの爺さんが言うのだ。

もちろん、私がこの爺さんを完全に信じたわけではない。他に方法が見つからないから仕方がない。本音を言えば、そんなところだ。

しかし、それを見抜いてなのだろうか？想雲はちよくちよく、私のプライドを刺激する。

「嫌なら、もう止めてしまえばいいんじゃないや。おぬしもそこまでして現世に帰ることもないじゃろう」

私はどうしても現世に帰る。帰って真相を突き止めたいのだ。

元部下シミズは、なぜ私をここへ連れて来たのだろうか？私と一緒に居たいがため？それとも単に会社から私を離れたかっただけ？

正直に言うと、私はシミズに対して愛情に似た感情を抱いていた。それも一人よがりだったのかもしれないと思うと、居てもたつてもいられなくなる。

「お師匠様、私にはこの修業は向いていないようだ。別の鍛練方法をお願いしたいのだが、構わなかね？」

「何を言っておるか。お嬢さんほど、向いている者は滅多におらんわい。ほれ、帰って来おったぞ」

——向いている？この私が？なぜ？——

それを聞く間もなく、子供たちが一緒に騒ぎながら帰って来た。別々に行動すれば、すぐに終わる買い物をみんな一緒に行っていたの

だ。

理由がわかれば、それを修正するだけだ。

「お師匠様、もう一度チャンスをいただけんかね？」

想雲がにやりと笑う。

「おまえさんが、子供たちに別々に行動しろとも言っのか？残念じゃが、それではあまり変わらんのう」

——では、どうすればいいのだ？私は急いでいるのだ——

想雲は私をちらりと見て、私の肩に手を置く。

「そうじゃな。おまえさんが現世でよくやっていたミーティングと  
いつのを試みるか。ただし、お嬢さんは発言禁止じゃ」

——私が発言せずに、どうやって改善していくというのだ？——

5人の子供たちをテーブルにつかせ、想雲が語りかける。

「では、少し聞かせてもらおうかの。五ヶ所の買い物を全員で行ったのはどうしてかの？」

やんちゃそうな少年が答える。

「みんなで行った方が面白いに決まってるじゃん」

私は思わず、口をはさんでいた。

「私はできるだけ早く帰って来なさいと言ったはずだ」

子供は私の言葉に目を見開いて驚く。

「だから、できるだけ早く帰って来たんじゃないか」

——— ということだ？子供たちは本当に早く帰って来たつもりなのか？———

私は言葉を失った。子供は子供なりに、私の指示に従っていたつもりなのだ。

——— 私の指示が間違っていたのか？いや、細かい指示をしても結果は同じだったのかもしれない———

私が悩み始めたのもお構いなしに、想雲が進行をしていく。

「次は、もっと早く帰って来れるようにするにはどうしたらええかのう?」

やんちゃそうな男の子を先頭に子供たちが答えていく。

「みんなで走って行けばいい」

「遅い人と早い人がいるよ?」

「一人ずつ別れて行くのはどう?」

「まだ道を覚えてないよ」

「僕が二つ行く」

「覚えている人だけでも別々に行った方が早いね」

子供たちは道に迷う者を知っていた。子供たちなりに最善の方法を選んでいたので。

しかも、改善方法まで自ら編み出しているではないか。

私は、子供たちの中に道に迷う者がいるのを知らなかった。他にも知らない細かい問題はあるのだと思う。

それらを知らずに「別々に行け」なんて言うのは問題を大きくするだけではないか？

「これでリーダーの役割はわかったじゃろう？」

「改善方法を彼らから引つ張り出すことか？」

「言わせるのが大事なのじゃよ。人は自分で言った通りの行動をするからのう。反論させるのは逆効果なんじゃよ」

私は、今まで立ち止まって考えることもなく部下たちに指示してきた。当然だが、彼らにも考えはあり私の知らない問題も抱えていたのだ。

私の頬には、いつのまにか温かいものがとめどなく流れていた。

——せめて一言、彼らに謝りたい——

そう思ったとたん、耳をつんざくようなでかい音でファンファーレが鳴る。

「レベルアップじゃ」

「はあ？」

子供たちがいつの間にか居なくなっている。

「さて、次の修業に入る前に飯にするかのう」

——まだ、続くのか——

そう思った反面、次の修業が少し楽しみでもある自分がそこにいた。

了

## m y f a t h e r

誰かと助け合うことで、人は喜びを得ることができます。

人はそのために生まれてきたのではないのでしょうか？

助けることができないとわかった時。関わるだけで相手の負担になっていると気付いた時。

そこにどうすれば、希望を見いだすことができるのでしょうか？

## — M y f a t h e r —

僕が五歳の時でした。僕と母さんを守るため、父さんは警察に捕まりました。

リトルと呼ばれる僕の同胞は、生れ付き虚弱ですぐに死んでしまいます。

叱られただけ、誰かの怒りを感じただけでもストレスで死んでしまうのです。

いたずらはし放題、言葉使いも最悪。人の心を平気で傷つける子供でした。

そんな僕を母さんは大事に育て、父さんはそれを見守ってくれました。

「どうして、父さんは警察に捕まったままなんだよ？父さんが悪かったわけじゃない。僕をテレビに出そうとする奴らとそれを止めなかった警察が悪いんじゃないか」

「お父さんはあなたが元気に育つことだけを願っているのよ。争い事は望んでいないはずだわ。お願いだから、わかってちょうだい、晴十郎」

母さんはわかっていない。父さんが一番に願っていたのは母さんの幸せなのです。

確かに僕が生きていることが母さんの幸せになる。結果としては同じなのかもしれない。それがわかっているから、僕にはそれ以上、何も言えませんでした。

それでも父さんだけが一人捕まっているのは釈然としないのです。

やり場のない気持ちを落ち着かせるために、僕は執拗に身体を鍛えました。

そして、十五歳になった僕は決心しました。

「母さん、僕が父さんを助けて来るよ」

十五歳とは言っても、普通の人間とは成長のスピードが違います。小学校からは学校に通ったが、卒業までに三年しかかかりませんでした。

リトルは、心身共に成長するスピードが早いのです。

すでに今年で大学も卒業間近。来年からは国の研究所に通うことになっています。

警察を相手にするなら、働き始めてからだと周りに迷惑がかかってしまいます。

「父さんはあなたに助けてもらおうなんて思っていないのよ。立派に社会に出ることが、父さんの気持ちに答えることじゃないかしら」

「母さん、そんなことはわかってるんだよ。父さんを助けたいと思うのは、この僕なんだ。父さんの犠牲の上に成り立つ幸せには、僕はもう耐えられないんだ」

僕がリトルだと思い出したのか、一瞬悲しそうな顔をした母さんが、笑顔を僕に向ける。

「強くなったわね、晴十郎。お母さんはあなたが心配でしょうがないの。お父さんが居なくなつて、あなたにまで居なくなれたらお母さんにはまともに生きていける自信がなかったの。母さんも強くないとね」

母さんは僕をここまで育ててくれました。でも、リトルがどうして死ぬのかなんて母さんにもわかっていません。

きつと涙を見せるだけでも僕が死ぬかもしれないと心配しているのです。

母さんが少しでも心配しないで済むように、僕は言いました。

「涙で僕は死なないよ。母さんが父さんを心配しているのもわかつてる。大丈夫、無理はしないから」

母さんの涙はすでにあふれてしまっていたけれど、それでもまだ気丈には振る舞っていました。僕に心配をかけさせないためでしょう。

「母さんのわがままであなたを苦しめてたのね。弱い母さんを許してちょうだい。お父さんにも謝らないとね。でも、もう大丈夫。あなたがそこまで言うのなら行ってきなさい。父さんも喜ぶはずだわ」

唯一、心配だった母さんの決心を見届けると僕はすぐに出かけました。

場合によつては、武力で解決させることもあるかもしれないと覚悟をしていました。

一度に大勢は相手にできないかもしれませんが、五人ぐらいまでならなんとかなると思っていました。

運動能力は普通の人間より、はるかに優れているのです。

——たとえリトルであつても殺されることがあるかもしれない——

刑務所の門をくぐる時。今までにないほどの緊張が、僕に覆いかぶさっていました。

リトルの外見は非常に特徴的で、一目ではつきりと普通の人間とは違うことがわかります。

髪も肌も真っ白なのです。瞳は薄紫色で、この目を母はよく誉めてくれました。

刑務所の職員方にもそれがわかっていたのでしょう。僕を一目見るなり、親切に父の所まで案内してくださったのです。

すっかり拍子抜けした僕は、浮き足立っていました。今日から、また父さんと一緒に暮らすことで頭がいっぱいでした。

しかし、僕を見るなり父さんは言ったのです。

「晴十郎か？ 帰れ。母さんの元へ戻るんだ」

あまりのショックに、僕は何も考えられなくなりました。父さんが僕を説得します。

「私は怒りを解放させることを覚えてしまったんだ。それが心地よいことだと感じてしまった。しかも、意識が薄れて自分でもコントロールできなくなる。私は、おまえと母さんを傷つけたくはない。お願いだ。私のことは忘れて帰ってくれ」

僕は父さんの言葉から、何かを感じ取りました。愛情の中に隠された何かを。

「お、おいっ。晴十郎。大丈夫か？ 誰か医者を呼んでくれ。早く、医者を」

僕は消えいく意識の中で、父さんに抱き抱えられているのを感じていました。

続  
く

## ターニヤの苦悩

ターニヤは苦悩していた。

「プーカウ隊、とても強過ぎね。しかも、ねちねち攻撃だよ。隊長の性格、きと悪いの間違いなしよ」

「プーカウって何？」

誰かの名前なのだろうか？この星にも長いこと滞在しているが、まだまだ知らないことは多い。

「あいや、ヨインさんにも知らないことがあたか？プーカウっていうのはあれだよ。大仏だよ。あれに人が乗っているね」

「大仏？大仏に人に乗った軍隊？それは強そうだね。立ち向かうだけでもバチが当たりそうだ」

「あ、私間違えたね。どーぶつだたよ。アニマルね。ヨインさん、バチて何か？」

この星にしばらく残って戦うと、僕が言うてから、ターニヤは僕の名前を呼ぶようになった。

ずっと緊張をしていたせいもあるのだろう。やっぱり、自分の国が心配だったのだ。

僕が戦うって言っただけで他に何も変わってはいないのだけれど、ターニヤには全く違うのだろう。

正直言って、僕はこの国を命懸けで守りたいと思っているわけではない。ただ、ターニヤを心から笑わせてやりたい。必死になる理由というのはそれだけなのだ。

「これだよ。ヨインさん、とくと見てくれるがいいよ」

いつのまにか、どこかへ行っていたターニヤが、本を持って走って来た。

子供が見るような写真付きの図鑑だった。ページを開いて、しきりに指差している。

「へえ、これがプーカウなんだ。牛にそっくりだな。そういえば、牛肉も長いこと食べてないな」

「腹へたか？ヨインさんもこれ食べるか？」

そう言いながら、彼女はニンジンガリガリかじっている。あれ以来、だいぶ気に入っているらしい。

「そうやって、みんながニンジンを食べてくれれば食料難にはなら

ないんだけどな」

「みんな、ニンジン食べるぐらいなら、死ぬべし言うね。匂いが嫌い言う。でも、プーカウはお祭りにはみんな食べるね。ヨインさん食べたいか？」

それを聞いて急にステーキが食べたくなる。久しぶりにこつてりした料理も良いものだ。

「え？どこかに売ってくれる場所はあるの？今日にでも食べたいよ」

僕が勢い良く聞いたせいか、ターニヤはしょんぼりしてしまった。

「お祭りの時に、ヒュージニアが送ってくれるね。今日は食べないよ、ヨインさん」

僕以上に残念そうにしているターニヤを見て、可哀相になった。どうにかしてあげられないだろうか？僕は考える。

——そうだ。僕の宇宙船で鶏を何羽か飼っていたんだ。卵を生んでもらうただけで一羽ぐらい、ローストチキンにしても構わないだろう——

「ターニヤ、今日は鶏を焼いてあげようか？」

「鳥？空飛ぶアニマルか？だめよ。神様、怒てしまっね」

宗教上の理由だろうか？まあ、そんなことがあっても不思議じゃない。

「ニワトリは飛ばないんだけどな。この国の人は全員、鳥肉を食べないの？玉子も？」

ターニヤが驚いていると言うより、羨ましそうな顔をしているのは僕の気のせいだろうか？

「ニワトリはおいしか？ヨインさん。鳥を食べたら、みんなに悪いこと起きるな。玉子はちょっと分けてもらうのは大丈夫ね。でも、たくさんはいかんだよ」

「そうだっ」

僕の突然の声があまりにも大きかったのか、ターニヤがヒツと声をあげて後ろにこけそうになる。

「驚いたよお、ヨインさん。びっくりさせごっこするか？次はターニヤの番ね」

ターニヤがアニメヒーローのような謎の構えをとるので、何をするのか気にはなったが僕は立ち上がる。

「宇宙船の冷凍庫にいいものが入っていたのを思い出したよ。プーカウと味が似てるかもしれない。ターニヤはニンジンを五本ぐらい用意しておいてよ」

ターニヤ以外の人にも、これが食べられるなら、食料飢饉は避けられるかもしれない。

僕は自然と早足になった。

キッチンではジューシーな肉がオーブンでじっくり、音をたてて焼かれている。

肉の油でガーリックと玉ねぎを炒めて、赤ワインを少し。デミグラスソースの完成だ。この何とも言えない香りに喉が鳴る。

ターニヤとパパーニヤ、ママーニヤが待つテーブルへ。僕は焼きたての料理を運ぶ。

「お待たせいたしました。食べる前に確認したいことが一つあります」

「早くするよ、ヨインさん。パパーニヤみたいに長い話はいいやだよ」

好奇心旺盛なターニヤはすぐにも食べたいらしい。僕も久しぶりにありつけるディナーに、はやる気持ちを押さえ付ける。

「パパーニヤさん、ママーニヤさん。あの錠剤は食べていないでしょうね？」

「ああ、そのことかね？大丈夫だ。国民全ての命がかかっているんだ。もう4日になるか。全くあれは口にしていけないよ。もちろん、ママーニヤもだ」

ママーニヤも僕の目を見てうなづいてくれた。

「私、生まれて初めてスープのおかわりをしてしまいましたわ」

あとは二人がニンジンを食べられるかだ。

「では、ターニヤがこれ以上待てそうにないのでどうぞ召し上がってください。お口に合うと良いですが」

皆で手のひらを額にあててお祈りをする。食事前の儀式らしい。

「おお、おいひーよヨインさん。プーカウにも負けないおいしさだよ。なんて料理か、これ？ターニヤ、毎日でもいいよ」

ターニヤが食べられるのは当然だ。問題は二人。パパーニヤとママーニヤなのだ。

ターニヤが食べたのを確認したパパーニヤが付け合わせのニンジン避けて、一口食べる。

「そうだな。プーカウに味が似ている。なかなかの腕前だね、ヨイン君」

ママーニヤもうなずきながら、食べてくれている。

「本当に、おいしいですね。ヨインさん。私はお祭りで食べるプーカウのステーキよりもこっちの方が食べやすいですよ」

パパーニヤは神妙な顔をして、ニンジンをフォークで突き刺している。

「さて、問題はこのニンジンだな。はたして我々にも食べられるのか、どうか」

パパーニヤは嫌いなものは先に食べてしまうタイプらしい。

匂いを嗅いで、ソースで匂いは消えているぞと自らを勇気付けている。

パパーニヤを見ているとあまりにも可哀相だ。もう少し見守っていても良かったが、僕は種明かしをしてしまう。

「パパーニヤ様、ご安心ください。あなたはすでにニンジンを食べたのです」

目を見開いたパパーニヤがこっちを見て固まっている。ニンジンが相当嫌いだったらしい。

「その料理はハンバーグと言つものです。私の宇宙船で保管していたミンチ肉を使いました。そこにニンジンも混ぜてあります」

「な、なんとつ」

僕は続けて力説する。ここからが大事な所だ。

「私の国では、古来よりニンジンを食べられない者はこのニンジンハンバーグを食べるのです。すると、昨日まで見るのも嫌だったニンジンが不思議や不思議、何の抵抗もなく食べられるようになるのです」

「な、なるほどのつ」

それでも、恐る恐るフォークを持ち上げるパパーニヤをよそにママーニヤはあっさりとニンジンを口に入れた。

「まあ、本当だわ。ニンジンもこうして食べるとおいしいのね」

それを聞いたパパーニヤも焦ったのか、すぐにニンジンを口に放り込む。

「ふむう？う、うむ。本当だ。ニンジンもなかなかうまいものだな。いや、このソースが味を引き立てるのであるか？いや、あっぱれだ、ヨイン君」

「ターニヤは明日もハンバーグでいいよ」

「ごめんな、ターニヤ。ミンチ肉はこれで全部使い切ってしまったんだ」

「ターニヤが一番お気に入りのような。ガッハッハッハッ。どれ、ワシのを分けてやろう」

「あなたっ。ヨインさんが作ってくださったんだから、残さず食べなきゃだめよ」

これが後に語られるニンジンハンバーグ晚餐である。学校の教科書に載るのはたぶん四年後だ。

続く

## ウラオモテのオモテ

自分の性格から考えて、僕は幸せになどなれないとは思っていません。

しかし、まさかここまで酷いものになるとは考えてもみませんでした。

これから、僕にとって生活というものはありません。牢獄のようなものとなるでしょう。

いや、すぐに殺されることもあるかもしれませんが。

なぜなら。とある事情で、僕はある女「モミジ」に捕まってしまったのですから。

僕は、恐ろしい女に見えない鎖でつながれてしまったのです。

——オモテウラのオモテ——

「あなた、朝ご飯の用意ができましたよ。もう、起きないと」

「え？朝ご飯？」

——「ご飯は食べられるのか？——」

モミジは僕を見るなり、頭を触ろうとします。

——「こゝ殺される？——」

「どうしたの？顔色が悪いわよ。今日はお仕事休む？」

「い、いや。ごめんなさい。大丈夫、すぐに支度するよ」

——「そうだ。さすがに仕事には行けるはずだ。こんなところで休めるわけがない——」

昨晚、モミジは人を殺して来たのです。僕そっくりの男を。

「本当に大丈夫なの？」

いつのまにか、モミジが僕の肩をさすっていました。抵抗すらできない僕は、緊張で身体が強ばります。

「寒気がするの？あら、熱があるみたいね」

彼女の左目の下には、ほくろがあります。僕をしつこく追い掛け回していた“あの女”のほくろは右・・・。

人の心とはなんと弱いものなのでしょう？元はと言えば、自分の弱さがこの状況を招いたのです。

僕のもとへ、“あの女”は突然来なくなり、僕は孤独になりました。

僕そっくりの“右利きの僕”に女を押しつけたのです。しかし、二人だけで仲良く暮らしているのかと思うと、どうしようもない気分になりました。

“あの女”を取り戻したくなってしまったのです。

そして、“右利きの僕”を殺しに行くところで、モミジに捕まりました。

モミジは、僕のために“右利きの僕”を殺しておいたと言ったのです。

僕も殺されるのではないか？どうしても、そんな考えが頭をよぎってしまふのです。

——モミジは僕のためだとは言っていたけど、単に気に入らなかつただけなんじゃないか？——

何しろ、ほくろの位置が左なだけで“あの女”にそっくりなのです。簡単に信用できるわけがありません。

「ねえ、あなた。やっぱり仕事は休んだ方がいいわ」

いや、本当に大丈夫だからと、僕が立ち上がろうとすると少し足元がふらつきました。

先にキッチンへ戻ろうとしていたモミジが、慌てて僕を支えようとしています。

「どうしてもって言うのなら止めないけど、私は休んでもらいたいわね。一日中、家で心配してるのは辛いでしょうから」

「そつだな。駅まで歩いて行けそうもないし、休むことにするよ」

僕が心配していたのは何だったのでしょうか？モミジは本当に僕の身体を気遣ってくれていました。

しかし、彼女は人を殺めているのです。

たとえ、僕のことを慕っているとしても愛情と憎悪は表裏一体。いつ、彼女が別の姿を見せるかわからないのです。

「あなた、お粥を作ってきました。残してもいいから、良かったら食べてね。私が食べさせてあげましょうか？」

「なんだか嬉しそうだね」皮肉ではなく、彼女は本当に嬉しそうにしていたのです。

「あなたが私の言うことを聞いてくれたからよ。看病もできるしね。あ、熱いからふうふうしてあげよか？」

僕の緊張はすでに解けているどころか、もう穿けないパンツのように緩みきっていました。

おそらく、鼻の下も自己最高記録をマークするほどに伸びていたかと思われます。

安心するとすぐに眠りについたのですが、起きるとモミジはベット脇で眠っていました。

そんな彼女を見てからです。僕は少しずつ変わっていきました。

僕は誰かに覚えていて欲しかった。気にかけてもらいたかった。ただ、それだけだったのかもしれない。

昔は、怪奇映画の如き面構えでアイスクリームを一時間かけて選んだこともありました。

充血するほど目を見開いて、ショーケースを鼻息で曇らせるのです。

鮮やかなオレンジ色の制服を着たスタッフは、声もかけられないほどに怯えていたことでしょう。

今思えば、そのような悪戯ばかりしていたのは、自分の孤独から目を背けていたからなのです。

僕は独りだという事実を受け入れず、誰かと関わりたいという欲求だけを解消していただけでした。

しかし、もう孤独ではありません。つながりさえあれば、人は強くなれるのだと思います。

「こうして毎日、平和に生きていけるのも、あなたのおかげよ。ありがとう」

そう言っ妻は毎日、僕に抱きついてくれます。その小さな身体を抱き締めると、また明日も頑張ろう、そんな気持ちになれるのです。

一つの気掛かりを除けば、本当に幸せでした。囚われの身の気分だったのが嘘のようです。

「なあ、少しだけ待っていてくれないか？」

「いいわよ。どれぐらい持てばいいの？」

僕には、もう耐えられませんでした。

「何年ぐらいだろう？でも、自首するんだから罪は軽くなるはずだよ」

僕がそう言つと、彼女はしばらく動けずに思い詰めた表情になつてしまいました。

「ごめんなさい。私どうしても言えなかったの」

僕が代わりに自首するから、と言ってもモミジは首を振るばかりです。

「そうじゃないの。誰も自首する必要なんてないの。今まで言えなくてごめんなさい」

子供のように泣く彼女が、僕の裾を強く握っています。

——モミジが事実を言えば、僕はどこかへ逃げていたかもしれな  
い——

彼女の嘘が僕を縛っていたのは事実です。それがモミジにはわかっていたのです。

本当に監獄行きを覚悟していた僕は、不思議な浮遊感に包まれていました。

「君に罪がなくて良かった。大丈夫、僕はどこへも行かないから」

浮かんで飛ばされぬように、どこかへ行ってしまうように、僕達はお互いをしっかりと掴んで離しませんでした。

「こっちに来るのは久しぶりだね」

彼女は、いつのまにか泣くのを止めてはいましたが、涙のようなほくろが右目の下に残っていました。

続く

## ジーロウの失敗

いつだってピンチというものは、突然まとめてやって来る。それはまるで、決壊したダムから押し寄せてくる洪水のようだ。

あつという間に飲み込まれ、何もかもを薙ぎ倒して行く。

しかし、起きてしまったことはしょうがないと思わないかい？そこ  
から、どうやって立ち上がるかで人の器が決まるんじゃないかな？

### ——ジーロウの失敗——

静かな午後のひととき。それがアフタヌーン・ティータイム。これこそが、誰にも邪魔されることのない空間。

自慢のジェンセン・スピーカーから、絶え間なく流れるチェロの音色に酔い痴れる。

お洒落なカフェで淑女の視線を集めるのも良いけれど、休日はやはり自分の部屋が一番だよな。

しかしだ。さつきから、鳴り続けているインターフォンが、静かなひとときの邪魔を止めようとしないう。

なぜ、あきらめてくれない？何の権利があって、この大事な時間の妨害をするというのだろうか？

——仕方がない。さっさと出て、帰ってもらおうとしよう——

僕は応答ボタンを押して、淡々と話す。

「そんなに長く鳴らしてもらっても、何も買わないよ。宗教にも興味がない。いい加減にあきらめて帰ったら、どうだい？」

「いるんだったら、早く出てよ。ケーキ買って来てあげたんだから、開けなさい」

——なぜだ？——

僕は相手の声を聞いて愕然とした。ワイルドフラワーが、なぜここに？今日、彼女は一日中仕事のはずなのだ。

「どうしたの？あなたの好きなニューヨーク・チーズケーキよ。話もあるだから早く開けてよ」

「あ、ああ。いや、突然だったから驚いたんだ。すぐ開けるよ」

——まずい。昨晚のことがばれたのか？いや、それはない。彼女の声は機嫌が良かった。とりあえず、証拠隠滅しなくては——

僕は、歯ブラシを隠し、ベットとカーペットにコロコロをかけまくる。

しかし、玄関のチャイムは無常にもすぐに鳴ってしまふのだ。

——こうなったら、仕方がない。他に隠すべきものがないのを祈るだけだ——

「やあ、僕の心のエステーションよ。わざわざ時間を空けて来てくれたのかい？嬉しいったら、ありゃしないよ」

僕は、ワイルドフラワーを熱く抱き締めた。できるだけ、彼女には余計なものを見せない方がいい。

「だめよう、ケーキが倒れちゃうじゃないの。でも、残念だわ。今日はあんまり長くは居れないの。こないだの仕事の件で話があるのよ」

「こないだ？何の問題もなく解決したじゃないか」

長くは居れないと聞き、喜んだ僕はケーキを受け取り、のせる皿選  
びに没頭する。

あえて漆黒の皿をチョイスし、チーズムースの白と、上に乗ったベ  
リー系フルーツの色を際立たせる。嗚呼、なんて素晴らしいコント  
ラスト。

紅茶も入れ直し、テーブルに運ぶまで4分48秒。流れるような手  
際の良さだ。僕は自分の動きに恍惚とする。

「ねえ、誰か来てたの？」

すっかり油断していた僕の血が一気に凍り付く。何を言っんだ、マ  
ドモアゼル？この短い間に、君は一体、何を見たと言っんだ？

しかし、そんなことをストレートに聞けるわけもない。僕はとびき  
りの笑顔で彼女に答える。

「誰も来るわけじゃないじゃないか、ワイルドフラワー。何かあったのかい？」

「あら、また殴られたいの？早いとこ、白状した方が入院しなくて済むわよ」

彼女の視線が突き刺さる。どうやら、よっぽどの証拠を目撃されてしまったらしい。

しかし、ここであっさりと負けを認めるのは彼女にも申し訳ない。殴られるのは怖くはないが、女性を傷つけるのは良くないことだ。

「ワイルドフラワー、君の暴力は美しいけれど、時として残酷だ。テレビヒーローの有り様は美しいけれど、ピンチになってから駆け付けるようでは、若干の遅刻なんだ」

眉間にしわを寄せ、首を傾げる彼女の目を見つめて、僕は続ける。

「つまりはそういうことなんだ、ワイルドフラワー。わかってくれるね？」

「それで、私が納得するとも思っているの？」

一見、笑顔を見せてはいるが、彼女の周囲は殺意に満ちている。どうやら、余計に怒らせてしまったようだ。

「そういえば、こないだの仕事のことで話があると言っていたね。時間もあまりないんじゃないか？このことはまた今度ゆっくり話さないか？」

「時間なんて関係ないわよ。今、ここで話さないで私の気が済まないのよ」

そう言いながらも、彼女は時計を気にしている。

——チャンスはここしかない——

「ワイルドフラワー、聞いてくれ。こないだの件で何かあったのなら、君の立場が危なくなるんじゃないのか？僕はまず、君の窮地を救わなくてはならない。お願いだから、話してくれ」

彼女は眉間にしわを寄せ、大きなため息をはく。

「私はこのくだらない制度にもう、うんざりなの。この責任はあなたに取ってもらわよ」

責任？結婚？出産？育児？引退？僕の脳裏にこれから起こることが走馬灯のように映し出される。走馬灯って、未来も見えるんだね。

——これは何よりの刺客だな。ひょっとして誰かが僕を？いや、考え過ぎか？——

「君の仕事は僕が守るよ、ワイルドフラワー。何があつたのか聞かせてくれないか？」

僕は力強く彼女の手を握り、目を真つすぐに見る。彼女は少し照れながら、口をとがらせ、ぼそぼそと話しはじめた。

普段は凜とした女性が、今では少女と化している。よほど、混乱しているのだろう。

「あの依頼人の女の子、まだ彼氏と別れていないわ。しかも、愛の審議会は私たちのカップル審議を疑い出したの」

「それはおかしいね。完璧に別れさせたはずんだけどな。あのガールがまだ別れていないから、審議会が動き出したのかい？」

「関係があるかはまだ、わからないわ。ジーロウ、あなたに心当たりはないの？」

愛の審議会というのは、政府のお役人によるお役所的機関だ。調査能力はほとんどないと言っていい。

事実、カップル審議が通らなかったという例を聞いたことがない。

もともと、犯罪抑制と少子化対策が目的なので、カップル仲介所と別れさせ屋がちゃんと働いていれば、審議会は事務処理だけをしていればいいのだ。

「調査と言っても、カップル審議を聞きなおしているだけだと思うよ。実際に動くとなると警察が調べるんだろうけど、別に誰かが死んだわけじゃないしね」

「じゃあ、私は安全ってこと？」

「ああ、危ないのはこうしてプライベートで会うことぐらいだよ。任務遂行できていなかった僕はライセンス剥奪されるかもしれないけどね」

混乱したワイルドフラワーの派遣、しかも最悪のタイミング、任務失敗の工作、そしてライセンス剥奪の危機。

やはり、何者かが僕だけを狙っているとは思えない。

——この上、警察にまで出て来られれば厄介だ。しばらく、行方をくらますかなさそうだな——

「ワイルドフラワー、僕はまず、警察に調べられる前にしばらく姿を消すよ。会えなくなるのは辛いだろうけど、君の安全のためでもある」

「じゃあ、女の子を調べておいてあげるわ。何かわかったら連絡するわね」

僕は彼女の両肩に手を置いた。

「いや、連絡も控えておいた方がいい。わかってくれ、君を危ないめに遭わせたくないんだ。しばらく、君は君の仕事だけしててくれ」

「私は大丈夫よ。自分の身は自分で守れるから。調査はしておくわ。連絡、待っているわよ」

クールな女性の方が、情が深いんだろうね。ただ待つというのがどうも苦手らしい。

——へたに刺激して、予想外の動きをされると厄介なことになる。さて、どうやって説得したもんか？——

まさか味方が足枷になるとは。これを計算しているとなると、かなり厄介だ。今まで、僕に気付かれずに仕事を妨害しただけでも勲章ものだ。

僕は、いつのまにかかなり厄介な人物を敵に回してしまったらしい。

ピンポン

彼女を説得する考えもまとまらない内にインターフォンがまた鳴った。今日は来客の予定はない。もう、繰り返し鳴る音に嫌な予感しかない。

——警察が動くにしては早すぎる。まあ、何かの勧誘だろう——

「ねえ。これってドアのチャイムじゃない？私が出て来ようか？」

普通の彼女なら、絶対にそんなことはしない。僕も、少し冷静さを欠いていた。

「いや、大丈夫だよ。僕が出る」

玄関のドアを開けると、そこには僕そっくりの男が拳銃を手に、無表情で立っていた。

僕がその時、最後に聞いたのは彼女の叫び声だった。

続く

## 難関シミズ

「私には、琴美さんが必要なんだ。どうしてもわかってくれないのですか？」

額に血管を浮かせて、叫んでいる男がいる。華奢ではあるが、私の元部下は気迫に満ちている。

「わからん奴じゃな、シミズとやら。彼女は、わしのものじゃと言  
うておろうが」

シヨッキングピンクの衣に身を包み、なぜかシミズに負けじと叫ぶ老人、想雲。一応、私の師匠らしい。

私には、時間があまり残されていない。向こうへ帰れる門というのが、もう少しで閉じてしまいうらしいのだ。修業も八割で切り上げる  
しかなかった。

私を帰らせないため、シミズに引き止められるのはわかっていた。  
しかし……。

——ただの口喧嘩じゃないか。私の修業は何だったのだ？——

さつきから、私など関係なしに言い争いを続ける二人をよそに、私は立ちつくしていた。

怪しげな妖術を操り、我が行く手を阻むシミズ（元部下）。そして、それを気功術的な力で対抗する美しき退魔士、琴美（元部長）

——そんな切なくも美しい戦いではなかったのか？——

私の予想を大胆に裏切り、二人は不毛な口論を続けている。

「だからっ。爺さんは黙っていてくれ。俺は部長に、いや琴美さんに話があるんだ」

「いや、それはわしを通してもらわんとう。琴美ちゃんは、貴様とは話しとっないんじゃないから」

——私の勘違いだった、ようだ——

こんな、ただの言い争いに、私はショッキングピンクの衣を着て、ついて来ている。つまりは爺さんとお揃いの衣だ。

ひたすらに、わしを信じろ、それで修業の成果が発揮できる、と想雲が言うから着てはみたものの・・・。

騙されて、この有様だ。いつから私は、爺さんのものとなったのか？

これほどの後悔と虚しさは今までに経験したことはあるまい。出来るのならば、今すぐ消えて無くなりたいたい。

——私は何を期待していたのだ？——

「仕方ありませんね」

シミズがゆっくり歩いて、想雲に近づいて来る。師匠は手をかざし、待ち構える。いつか、やったようにシミズを消し去ってしまうつもりなのだろう。

——このまま爺さんの言いなりになっても良いのであろうか？——

「同じ手が二度通用するほど、私は甘くありませんよ」

「琴美つ。逃げるんじゃ」

私がブーツとしている間に、シミズが目の前に立っている。その向こうでは想雲が倒れている。何が起こったのか、全く見ていなかった。

「琴美さん、僕と一緒に暮らしましょう。必ず幸せにしてみせますから」

シミズはそう言い、私の手を握る。しかし、今となってはどうしても良いことだ。

「ほお。君が私をどうやって幸せにすると言うのかね？企画書を見せたまえ」

「そ、それはまだ・・・」

さっきまでの勢いは嘘のようにシミズは口を閉ざしてしまう。

——— どのいつもこいつも信じられん ———

「い、いかん。奴の思い通りになるんじゃない。自分を信じるのじや。そして、感謝じゃ」

想雲の声にはつとしたが、すでに遅かった。目の前でシミズが笑みを浮かべている。

「あなたに人を信じることなんて出来はしない。そうでしょう、琴美部長？」

——身動きがとれない。こいつ、これが本性なのか？——

「どうやら爺さん、あんた半分欠けているようだな？それでよくラブマスターなんて言えたもんだ」

「ふん、関係ないわ。例え、わしが全てを説明できていなくとも、その子はやると決めたらやる」

半分欠けているやら、全てを説明できないやら、私には何のことだかさっぱりだ。しかし。

——私は元の世界に帰ると決めたのだ。今は師匠の教えを信じるしかない——

私は、徐々に動けなくなった身体に気合いを入れ、声を振り絞る。

「想雲師匠。確か、もう一人の自分が見ていると意識する。そうでしたな？」

「そうじゃ、感謝も忘れるでないぞ」

最終段階の修業。やむなく途中で切り上げたのではなかった。

ショッキングピンクの衣だからと言って恥ずべきではない。自分を恥じた時点で腕は縮こまる。

——これすなわち、キャッカンシー——

たとえ、子供であろうと言いつ分はある。こちらの希望を伝え、頼れば必ず応えてくれるもの。

——これすなわち、ジンジリヨク——

——そして、それにカンシャが加われれば、最終奥義は完成する——

師匠は言っていた。おぬしのようなショシカンテツの力を持つものは必ずや、奥義を習得できる。おぬしほど、うってつけの継承者は

おらんのじゃ、と。

シミズの呪縛が解け、私の身体が再び自由を取り戻す。

「さあ、シミズ君。どこからでもかかって来たまえ」

期待通りの展開に、私は胸が高鳴る想いだった。これだ。この死闘の末、私は勝利と目的達成を収めることができるのだ。

しかし、シミズは一向にかかって来ない。そればかりか、タバコを取り出し、火を付けている。

——これは余裕なのか？それとも、あきらめたのか？——

「き、きみ。どういっつもりなのかね？態度がなつとらんよ」

シミズは、ため息と共に大きく煙を吐き出す。心なしか、少し笑っているようにも見える。

「琴美さん、別にどこへなりと行ってもらっても構いませんよ。どうせ、あなたはもう、目的地にはたどり着けないのですから」

「どういづことかね？説明してくれたまえ」

——ついさっきまで、私を動けなくしておいて、なぜ？——

「おぬし、道をふさぎおつたな」

シミズは背後からの声に振り返る。

「爺さん、まだいたのか。もう戻れないんだから、あんたはもう必要ないんだよ。これからは、琴美さんと二人っきりの世界になるんだからな」

このシミズの余裕。おそらく、道がふさがれたのは本当なのだろう。もう、時間を稼ぐ必要はないのだ。

だが、我が師匠想雲はまだあきらめてはいない。

「琴美、あきらめるのはまだ早い。自分を信じよ。さすれば、おまえ自身が必ず助けてくれるはずじゃ」

そうだ。カンシャで奥義は完成する。しかし、この状況で何に感謝しろと言うのか？

「琴美さん、あなたが戻ってもまた同じ過ちを繰り返すだけじゃないですか？」

「シミズとやら。それはおぬしの我儘じゃ、ただ人の足を引っ張っているだけではないかの？」

またしても、二人のいがみ合いが続く。どちらの言い分も理解はできるのだが……。

やり方は間違っているが、シミズは私のために自害した。師匠は、報酬もないのに稽古をつけてくれた。

——二人の気持ちに、報いなければ——

私になら、できるはずだ。そう思った時だった。

——私がもう一人？——

我が目の前に立っているのは、自分と瓜二つの女性だったのだ。

続  
く

ヤマイ

我が息子、晴十郎は倒れてしまいました。

私は、なんてことを言ってしまったのだと自分を責めました。リトルの勘の良さを侮っていたのです。

しかし、そうしている間にも息子の容体は悪化します。治るかどうかなんて考える前に、私は各地を飛び回りました。

私は息子のため、何人もの医者やリトル研究者の元を訪れていたのです。

そして、唯一晴十郎を助けられるかもしれない人物のもとへ辿り着きました。

——ここが最後の希望。なんとしてでもこの博士に助けてもらわなければ——

しかし、ようやく会えた博士は今起きたばかり、というような顔をして出て来ました。

薄汚れたバスローブに、ぼさぼさの頭。切れた電球のように光を失った、その眼差し。

発する言葉も、悪い予感をなぞるものでした。

「ああ、帰ってくれ。そのことはもう考えたくないんだ」

この男が、本当に優秀な研究者なのでしょうか？

原因不明の引退をしたとは聞いていましたが、ここまでのものとは私は、目がくらむようでした。

「リトルの研究はもう辞めたんだ。衰弱しているなら、もう先は長くない。こんな所に来るより、傍に居てやりなさい」

——傍に居てやりなさい？——

この飛坂博士には、悪い噂しかありませんでした。しかし、リトルの延命記録で彼に適う者はいないそうです。

私はどんなことをしても晴十郎を治してやりたい。腕さえ良ければ悪人だろうが、誰でも良かったのです。

「やはり、リトルを戦争の道具にしようとしていたと言う噂は、でまかせだったんですね。あなたはリトルを道具だとは思っていない」

「リトルを兵器にしようとしていたのは事実だよ。こんな老いぼれには何も残ってはいないのだ」

私は深く頭を下げました。

「どうか、息子を救ってやってください」

「私にできることなど何もない。とつとつ、帰ってくれ。これ以上ここに居るのなら警察を呼ぶからな」

私には、彼がそれほど悪い人物にはどうしても見えなかったのです。それに時間もあまり残されていなかった。

——この飛坂博士。信じても良い人間だ——

「警察を呼びたければ、呼ぶがいい。どうせ何もできやしない」

私は自分に怒りを向け、再びデビルの姿になったのです。

「そ、その姿は？リトルというのはあなただったのか」

博士が心ない人物であれば、まともに話すこともできなかったでしょう。私は暴れたい衝動を必死に押さえていたのです。

「いや、違う。私はただの人間だ。あなたなら、聞いたことはあるだろう。晴十郎と言うのが、私の息子だ」

晴十郎・・・とつぶやいたまま、博士が額に手を当てています。もう、先程とは目つきがまるで変わっていました。

「晴十郎はすでに十五歳になっている。どうか先生の力で助けてやってもらえないだろうか？」

「聞きたいことは山ほどあるが、話は後だ。すぐに用意する。待っていたまえ」

飛坂博士は向かうタクシーの中で、何件かの電話をかけていました。知り合いの医者や看護師の応援を依頼していたでしょう。

しかし、中にはよくわからない内容の電話をしていらしたようです。

「あ、もしもし？探偵事務所の方？ちょっと人探しをお願いしたいんだけどね。・・・ああ、それで申し訳ないんだが今から言う番号に電話をかけてだね・・・。そうそう、うん。詳しくその方の特徴を聞いて欲しいんだ」

私は横に座っていたので、どうしても聞こえてしまいます。

「あの、どなたか行方不明の方でも？」

「行方不明と言うか、存在しているかもわからないような人物なんだけどね」

そして、博士はまた電話をかけるのでした。不思議と気になることでしたが、そのままタクシーは到着してしまっただけです。

晴十郎を預けている病院です。様々な検査を受けた後、妻と私で博士から、質問を受けていました。

「いいですか。リトルは必要とされることで少し寿命が伸びます」

奥さん、と飛坂博士が妻に話し掛けます。しかし、妻は放心状態でまともに返事ができませんでした。

「リトルは申請すれば、また育てられますよ。私の方から推薦しておきましょうか？」

妻は急に立ち上がり、博士の腕をつかみます。

「あの子じゃないとだめなんです。先生、お願い。あの子を助けてください」

「絵美佳、やめるんだ」

私が妻を博士から離そうとする前に、彼女は全身の力が無くなったように床にへたり込みました。

博士はしゃがんで、妻の両肩に手を置きます。

「今は気落ちしている時ではありません。お母さんのその気持ちを少しでも晴十郎君に伝えるのです。さあ、立って」

私が手を貸して、妻が立ち上がると彼女の手が戻って来るのがわかりました。

「そうね。私がすっかりしないと晴十郎が可哀想だね。先生、私行

ってきます」

私も妻について行こうとすると、まずはお母さんからにしましょう、と博士に止められました。

妻は看護師の方に付き添われながらも一人で歩いて行ってしまったのです。

「さて、問題は晴十郎君が倒れた原因です。私は、あなたがああいう姿になられることが関係あるのではないか、と考えています」

椅子に座りなおした博士が、横を向いて独り言のように話します。

「あなたは どうして、あの姿に変身するようになったとお考えですか？」

—— おそらく、こんな話ができるのはこの博士しかいない。そして、晴十郎が回復するためにも——

私は、重い口を懸命に開きました。

「私はおそらく、我慢していたのです。幼い頃の晴十郎の言葉、私

に関心を示さなくなった妻の態度を、です。二人を愛すれば、愛すほど、私に刺さる刃は鋭さを増していきました・・・」

心のふたを、あまりにも堅く、閉めてしまっていたのでしょうか。

何かが込み上げて来て、言葉に詰まりました。が、博士は何も言わずに待っていてくれます。

「・・・どうすれば、良かったのでしょうか？私にはただ、二人を遠ざけるしか・・・」

「しょうがないことです。あなたはリトルを浄化していたのですから。私には、恐ろしくてできなかったことですよ」

——リトルを浄化？——

博士が私の方に向き直り、続けます。

「リトルには、生まれつき悪意が充満しているのです。破裂する前の風船と同じです」

——だから、叱ったり怒りを感じたりするだけで死に至るわけか

「あなたは、中に入っているものを吸い込んで、きれいな空気を入れてあげた。リトルは生き延びるが今度はあなたの身体に異変が起きています」

「では、なぜ倒れたのが晴十郎で私は元気なのです？」

——リトルなら死んでしまうのに、なぜ私は生きている？——

「まず、あなたが元気な理由ですね。悪意が、致死量ではないからです」

「それは私が赤ん坊ではないからでしょうか？」

博士は少し笑い。失礼、当然の疑問でした、と謝る。

「悪意の致死量は身体の大きさには関係ありません。むしろ、リトルの方が耐えられる量は多い。あなたに悪意が移る過程で浄化されていたんですよ」

私は癒されていたのです。

——妻が、晴十郎が、私を助けてくれていた、のか？——

私は思い上がっていたのです。自分だけが、我慢して何も得ることはなかったのだと、そう考えていたのです。

——私は間違っていた。晴十郎のせいでこんな身体になったわけではないのだ。私の浅ましい考えが自分を蝕み、晴十郎の命を奪おうとしているのだ——

「なりますよ」

「はい？なんでしょう？」

「どう頑張っても、デビルにはなります。ただ回復、浄化は一緒に暮らしていけば、いずれ可能だと思っています。だから、自分を責めてはいけません」

——この人、私の考えていることがわかるのか？——

「さて、晴十郎君の治癒ですが」

「私の悪意が入り込んだから、私たち夫婦で浄化すれば良いのでは

「？」

そう言いながら、私はふと気付きます。

——いや、晴十郎は私がない十年間生きていたのだ。どうして、急に？——

結論から申しましょう、と博士が切り出しました。

「晴十郎君には悪意が全く残っていないのです。あなたが吸いすぎた。彼を今、苦しめているのは罪悪感。あなたへの想いです」

では、私の悪意を晴十郎に分ければ良いのではないか？そうすれば罪悪感など、感じなくても済むのではないか？

そう、博士に言っても彼は渋い顔を崩すことはありませんでした。

「今の晴十郎君に、悪意はそう簡単に分けられないのです。あなたへの罪悪感で、耐えてしまう恐れがある。以前のあなたのように」

晴十郎はもう助からないのでしょうか？私は、これから家族で幸せに暮らして行こうと決意したところなのに。

「博士、お電話です」

看護士に呼ばれた博士は、失礼、と立ち上がり部屋の外に出ていきました。

私は妻になんと言えは良いのでしょうか？いつ、デビルになるかわからない私一人で、妻を支えていけるのでしょうか？

部屋に戻って来た博士が、いきなり私の肩をつかみます。

「一人だけ、晴十郎君を治せる人物がいます。私も半信半疑だったのですが、今、確認が取れたところです」

「ほ、本当ですか？ありがとうございます。その方は、お医者様なのでしょうか？すぐにでも、お迎えに行かせていただきます」

しかし、博士によると医者ではないらしく、私たちで直接お願いしに行かなければならないらしい。

「変わった人なんです。博士のような研究者の方なんですか？」

「まあ、ある意味では研究者ですが、ちょっと違いますね。愛の伝導士、ラブマスターです」

——宗教・・・、なるほど宗教か・・・——

私は、内から湧き出る不安を隠すことができませんでした。

続く

## ヨイン障害ターニャ

僕、ヨインは苦悩していた。

——ターニャとの結婚がまた遠ざかって行く——

ニンジンハンバーグで、パパーニャ、ママーニャには人参を食べてもらえるようになった。

が、しかし、問題は国民にどうすれば食べてもらえるか、なのだ。

誰しもが命を落とすとわかっているものを口にしたくはない。この国で人参は、食べ物だとも思われてはいないのだから。

さらに困ったことに、この国で内紛が起きてしまったのだ。

「ヨインさん、あれをとくと見るがいいよ。プーカウだよ」

見た事もないプーカウ隊が城を取り囲んでいる。しかも、掲げているのはヒュージニアの旗ではなく、この国の旗。

決定的なのは、中に人参を作る農民達が半分を占めていたことだっ

た。ヒュージニアの後盾があつたとしても、国内で組織された軍隊には間違いないだろう。

相当な権力と経済力がなければ、あの軍隊が作れるはずはない。

さらに、パパーニヤがいつのまにか誘拐されてしまい、我々には戦術がもう残されていなかったのだ。

僕、ターニヤ、ママーニヤの三人は、身内だけの相談をしているところだった。

僕はもう、どうしていいのかわからなかった。ターニヤとの結婚が全ての発端であることは間違いないのだ。

「一体誰がこんなことを？」

「パパーニヤはお城の外に出さないよ。この中だけで遊ばせるよ」

飼い猫のような言われようだが、その通りだ。誘拐するには疑われずに城に入ってくるしかない。

「不審者の報告もありませんでしたし、身内の犯行なのでしょうか

？」

城を囲んでいるのは、プーカウ隊とニンジン生産者の者達のみ。ヒュージニアの者は、一人もいないらしい。

「彼らの先導ができて、プーカウ隊を秘密裏に結成できる人物は、城の中でも彼だけでしょう」

「ママーニヤ、私あの者は嫌いはないよ。パパーニヤとも仲良しだよ」

すでに二人には、首謀者が誰なのかわかっているようだ。

「では、ママーニヤ様。その者の犯行だとして、動機に心当たりはございますか？」

「それがわからないのです。ヒュージニアとの交渉を控えた大事な時期だと言うのに、こんな」

「良ければ、私が直接ご説明いたしましょう」

部屋に男が一人で入ってくると、ママーニヤがガコモーノ大臣、と

つぶやく。

「パパーニヤをどこにやたか？」

「ご安心ください。パパーニヤ様は、仮にも国王の身。丁重なおもてなしをさせていただいております」

このガコマーノ大臣と言うのが、どうやら首謀者のようだ。ターニヤも言っていた通り、悪い人には見えない。

むしろ、この人物が国王でもいいんじゃないか？と思うぐらいの精悍な顔立ちと優しさを感じさせる部分がある。

「あなたのような方がどうして国王を誘拐されたのですか？」

ガコマーノ大臣は困った顔をして答えない。僕を邪魔者扱いしているのが、言わなくてもわかる。しかし、ママーニヤがはつきりと言い放つ。

「構いません。この者は、ターニヤとの結婚を許された者なのです。言わば、私たちの身内も同然。それに聞いてもらった方が話も早いではありませんか？」

ははあ、と彼がお辞儀をすると、僕は一睨みされる。

「恐れながら、この者がターニヤ様との結婚を決められた事で、ヒュージニアを敵にまわすことになります。私は、それに先手を打つたまで」

「そうですか。あなたがヒュージニアと組んでクーデターを起こすつもりなのですね？」

——このガコマーノ大臣。この国を守りたい一心で——

「ただでさえ、過酷な労働を強いられるニンジン生産者は大きな不満を抱えております。さらに、ヒュージニアとの戦争にでもなれば、この国は団結するどころかバラバラになりましょう。私はこの国を守りたいのです」

「それでヒュージニアに協力を求めたのですか？よく、あれだけのプーカウを集めましたね」

僕とターニヤの結婚は、やはり色んなところで問題になっているようだ。

しかし、さつきから話を聞いていると僕にはどうしても気になる事があった。

——この大臣、ニンジンが食べれることを知らないんじゃない？——

それを知っていれば、おそらく戦争は避けられることがわかるはずだ。第一、クーデターなど起こす必要もない。

僕はそれを大臣に告げようとする。あの、と言うとそれにかぶせてママーニヤが言う。

「それで王の処刑はいつになるのです？それぐらいは教えてもらえるのでしょうか？」

「な、何を言っているのです？そんなことをしなくとも・・・」

「良いのです。これは、民、百姓にまで目が行き届かなかった私たち家族の問題。しかるべき罰を受けて当然です」

ママーニヤはどうしてしまったのか？ターニヤは魂が抜けたように、ボーッとしているだけで何も発言しようとはしなかった。

そして、パパーニヤ王の処刑日はあつと言う間にやって来た。

ニンジン生産者によるクーデターだ。王の処刑方法はおのずと決まってくる。ママーニヤには、これがわかっていたのだ。

前代未聞の処刑に、何万もの人が集まった。テレビ中継まで、されているらしい。

ママーニヤ、ターニヤ、僕の三人は処刑が行われるまでは拘束されるという約束で、王の近いところで見守っていた。

「あ、パパーニヤ。あんまり元気ないよ。もっとアピルするがよろしね」

「死ぬ前に元気だったら、怪しまれてしまうよ、ターニヤ。やっぱり、錠剤は飲んでいないから痩せてらっしゃいますね」

いくら、死なないとわかっていても心配なのだろう。ママーニヤはただ、ええ、と言ったままパパーニヤを見守っている。

僕たちの準備は完璧だ。ニンジン生産者の皆さんが仲間になれば、この場を制圧するのも簡単だろう。

全てはパパーニヤの振る舞いと、その言葉にかかっている。

「それでは、始めよ」

処刑なので当たり前だが、音楽もなく、あっさりと始められた。王は食べられるとは言え、嫌いなニンジンを口に詰め込まれる。

しかし、当然ながら王は死ななかった。三本もの人参をたいらげた王が恫喝する。

「ひかえよ。縄をほどくのだ」

立ち上がった王の縄を、近くにいた兵が慌てて解く。しん、と静まり返った何万人もの人々が、壇上のパパーニヤを注目している。

「見ての通り、ニンジンを食べても私は死んではおらぬ。諸君が日頃食べている錠剤、あれが毒なのだ。我々はヒュージニアに騙されていた」

王がニンジンをつかんで掲げると、喝采、叫び声が一気に沸き起る。

「ニンジン生産の者達には、これから国民の食料を支える事を意識して、誇りを持って働いてもらいたい。我々は今こそ、立ち上がるのだ」

ガコマーノ大臣は、地面に這いつくばるようにして頭を抱えていた。

「私は、私はなんという事を。大臣が王を信じられないばかりか、処刑にかけるとは・・・」

「ママーニヤ様、後はよろしくお願いいたします」

万が一、彼が自殺をしないためにママーニヤが監視することになっていた。

僕とターニヤは走りだした。

「プーカウ隊のリーダーから大人しくなてもらうね」

「僕は農民の皆さんに協力をお願いしますよ」

身軽なターニヤは、あっと言う間に僕を追い抜いて行き、プーカウ

隊の中へ飛び込んだ。

パパーニヤの演説が効いたのか、農民も含めて、軍隊はすぐに鎮圧される。

「これで、今日はハンバーグね。ターニヤ、すごく楽しみだよ」

うなだれた大臣が、ロープでぐるぐるに巻かれていた。

「さて、問題はおまえの処分だな」

パパーニヤ王は、僕を処刑しようとした時の残忍な顔になっていた。

——僕が口をはさむことじゃないかもしれないが、どうにか助けてあげられないものなのか？——

「プーカウのハンバーグはおいしかな？楽しみな、ヨインさん」

それどころじゃない緊迫した状況でもターニヤは無邪気だった。

——いや、何かがおかしい——

いくらなんでも、ターニヤはそこまで空気を読めない女性ではないはずだ。

「ターニヤ、何か知っているんだな？」

「ターニヤは何も知らない。ママーニヤだけ、知てるから。ガコモーノさんはたぶん大丈夫」

——ママーニヤだけ？パパーニヤではないのか？どういうことだ？——

大臣の前に立つ、パパーニヤの沈黙に耐えかねたのか、プーカウ隊士が、騒ぎだす。

「戦争がなけりゃ、作られた俺たち軍隊はどうすりゃいいんだ」

「そつだ。反逆者ガコモーノはニンジンを食べ」

その言葉でパパーニヤは目を丸くする。何かに気付いたのだろうか？にやりとして、ママーニヤとアイコンタクトしていたのだ。

パパーニヤが両手を上げて、皆を静まらせる。

「ガコマーノよ。何か申すことはあるか？」

「私を処刑してください。でないと、規律が守れなくなる」

再び、プーカウ隊士達が騒ぎだす。活躍する機会がなかったので、鬱憤がたまっていたのだらう。

「静まれいっ」

パパーニヤ王は今や、ニンジンを食べたカリスマだ。元々、大きな体が余計に大きく見えている。

皆が彼に注目しているのだ。

「ガコマーノ大臣は、この国を守りたい一心で戦おうとした。その勇氣、これからのヒュージニアとの交渉には必要不可欠である。異存のある者は前へ出よ」

静まり返る男たち。当たり前だ。この場で、王に反論できる者など一人もいないだらう。

「男たるもの。一度決めたことは最後まで貫き通す。ガコマーノには、ヒュージニアとの交渉で活躍してもらおうではないか。皆の者よ」

一斉に叫び声が轟き、地鳴りのような足踏みが大地を揺らす。平行感覚が鈍るほどの騒ぎだ。

ターニヤも騒いではいるが何を言っているのか、まったく聞こえない。

これは、後から大臣に聞いた話だ。

兵士がガコマーノ大臣の縄を解くと、王が近づいて来て耳打ちしたと言う。

「全てママーニヤが仕組んだことなのだ。許せ、ガコマーノ」

ここまでの話も、四年後ぐらいに教科書に載るだろう。ここからは、教科書には載らない話。

——ようやく、ターニヤとの結婚に近付くことができた——

皆が騒いで、誰もが興奮状態だった。僕はターニヤに駆け寄る。お互いに何を言っているのか聞こえない。

僕がターニヤを抱き抱えようとした時だった。見えない壁が、僕にぶつかる。

「ログインパスワードを入力してください」

僕だけが、興奮から一人取り残されていくのを感じていた。

続く

## ウラガエシの悲劇

「我々にはオモテの人間が邪魔なのだ。残念だが、おまえから死んでもらおう」

僕が、僕に殺されそうになるのはこれで二回目です。しかし、今度は助かりそうにありません。僕は紐で固定され、身動きもままならないのですから。

こうなったのも、最愛の妻を助けるためでした。ほくろの位置が真逆なだけで、ストーカー女とそっくりな妻。

その容姿のおかげで、初めは僕も彼女・モミジを信じることができずに警戒心をむき出しにしていました。しかし、彼女の優しさに徐々に僕は惹かれていったのです。

しかし、幸せが終わりは突然やって来ました。モミジのほくろの位置が変わっていると思ったら、あのストーカー女に入れ替わっていたのです。

「あの男を止めるのよ。そしたら、あんたの嫁は返してやってもいいわ」

彼女はそんな要求を僕に突き付けました。他のことならまだしも、モミジのこととなると、私は従わざるを得ないのです。

ウラとオモテは何となくつながっているでしょう。僕には男の場所がすぐにわかりました。

しかし、今ではこの有様です。僕がやって来るのも男にはわかっていたのでしょう。あつと言う間に、十人ほどの彼の部下に取り押さえられてしまいました。

僕は後悔するよりも、妻の無事を祈っていました。こうなるのは、ここへ来る前からなんとなくわかっていた。

僕にはもう思い残すことはありません。こんな自分でも、いとおしく想ってくれる女性と出会えたのですから。

「さて、誰がこいつを殺す？」

十人ほどいる部下達は一斉に俯きます。誰もが人間を殺すなんてことはしたくないのです。

「馬鹿やろつ。誰か根性のあるやつはいないのか？」

僕そっくりな男が、いくら怒鳴り散らしても誰も立候補しようとはしません。

——もしかしたら、生き延びれるかもしれない。

僕は、慎重に、刺激しないように気を付けながら質問をします。

「あ、あの。どうしてオモテの人間が邪魔なのですか？一緒に仲良く暮らして行くのはどうでしょう？」

彼はすごい形相で僕を睨み、叫びます。

「黙れっ。元はと言えば、おまえがあの子を俺に差し出したからではないか。面倒なことはいつも我々に押しつけられているだけだと気付かされたのだ」

あの子……。モミジのオモテに充たる女性です。しかし、あのストーカー女は彼を心から必要としている。どうにかしてあげられないものでしょうか？

「見る。感情などなかったはずの私達がおまえ達のせいでイライラしているだろうが」

彼は吐き捨てるように、これだけでも万死に値するわ、と独り言のように続けます。

「それじゃあ、僕たちがこれからあなた方をお手伝いできるように・  
・・」

「我々は面倒など起こさなのだっ」

僕の意見を聞く様子もなく、場は静まり返ってしまいました。問題はあのストーカー女。一体どうすれば、彼を幸せにできるのでしょうか？

僕はこれから殺されるにも関わらず、それだけしか考えていませんでした。

「何をグズグズしているのかしら？」

彼の部下達が道を開けたかと思うと、そこからストーカー女が現われたのです。

「楓、おまえどうやってここへ来たんだ？」

「そんなこと、どうだっていいじゃないさ。そのナイフ貸しなよ。私がいっつを殺してあげるよ」

女は彼に認めてもらいたい。役に立ちたいのでしょう。彼女は、狂気を携えた笑みを浮かべ、僕の正面に立っています。

——僕が彼女に殺されても、彼が幸せになるとは思えない。こんなことになるなら、この女と徹底的に争うべきだった。

いくら後悔しても過去には戻れません。僕は、必死に縄から抜け出そうとします。しかし、簡単に解けるわけはありません。

「最後まで見苦しい真似をするんじゃないよ。男らしくないねえ」

なんと言われようが、僕は暴れ続けました。しかし、彼女はナイフを構え突進して来たのです。

「止めるんだっ。君の夫がより苦しんでしまうことになるん……ぐっ」

僕に覆いかぶさる女。目を開くと左目の下にほくろが見えました。

「良かった。間に合ったわ」

彼女の胸元が、見る見る内に赤く染まっていきました。

「モミジ、どうして？」

彼女のすぐ後ろでは、目を丸くした楓がナイフから手を離していました。

モミジが僕の顔を抱き、消えゆくような小さな声でありがとう、と囁きます。彼女の呼吸と鼓動が荒々しく僕に伝わってくるのに、僕は身動きが取れません。

「駄目だ。おい、死んじゃダメだぞ。生きるんだ。また、二人で一緒に暮らそう。そうだ、子供だ。僕達には子供がまだじゃないか。二人かな？ いや、三人がいい。子供を育てよう。一緒に居てくれよ。なあ、僕には君が必要なんだよ。おい、起きてくれよ。なあ、起きて――」

カランと音がしたかと思うと、まるでそこには元々居なかったかのように、モミジは消えてしまいました。

残ったのは、突き刺さっていたナイフとモミジのぬくもりだけ――。

ざわざわとウラ達が辺りを見回しています。「おい、消えちまったぞ。どこへ行ったんだ？」

――僕は、愛する女性一人守ることもできないのか？どうして彼女が死ななきゃいけない？許せない。何よりも僕が許せない。

僕はあまりの怒りで意識が混濁しはじめました。

「おい、ボスが大変だ」

僕のウラは頭を抱え、床をのたうち回ってました。彼の髪の毛や肌はどんどん色を失っていきます。

「ボ、ボス。大丈夫ですか？」

僕は支えられ、立ち上がると全身は真っ白。髪の毛も薄い金色となっていたのです。

僕はどうやら、ウラと意識を一体化させたようです。全身に憎悪を蓄積したように、わけもなく怒りがあふれてきます。

脱け殻のようになった張り付けられた僕の身体がとても目障りでした。

起き上がるのに手を貸そうとした部下を力任せに殴りました。

「何をぼやぼやしてるんだ？おい、早くあれを燃やしてしまえ。目障りでしょうがねえ」

「へ、あ、はい」

一斉に部下達が僕の身体に近付こうとすると、今度は楓がナイフを手立ちふさがります。

「近寄るんじゃないよ」

「おい、楓。何してるんだ？わけがわからんぞ」

楓の背後には、いつのまに入ってきたのか黒豹のような男が立っています。

「楓と言ったな。私がこの体を運んでやろう」

黒豹はそう言うと、張り付けにされていた僕の体を剥がして抱えま  
した。

「おい、何を好き勝手にやらせているんだ。止めろ」

部下が次々と飛び掛かっていましたが、楓が虫を追い払うように  
薙ぎ倒していきます。

黒豹は、背中に翼が現われたかと思うと窓から飛び出し、見えなく  
なっていました。

「てめえ、楓。あんな奴に体を渡しやがって。どうするつもりだ」

怒りでどうしようもない自分が、楓に向かっていきます。彼女があ  
っさりかわした先のテーブルは真っ二つに叩き割りました。

「ぐぬう。許さんぞ。俺の邪魔をする奴は一人残らず、粉々にして  
やるわ」

そんな暴走としか言えない僕に、少しも怯えることなく楓は近付い  
て来ます。

「待っていて。あなたは私が必ず元に戻してあげるから」

その思い詰めたような目の下には、左右どちらにもほくろはありません。

そして、彼女は黒豹と同じように窓から、飛び出し姿を消してしまっただけです。

続く

## ジーロウの余裕

ジーロウがいなくなつて一週間が経っていた。私の頭の中には、調査委員のことを考える余裕など何一つ残されてはいない。

もう自分の仕事なんてどうでも良くなつていたのだ。

ジーロウがなぜさらわれたのか、可能性のあるところから調べていく。あのジーロウそっくりの男は何者だったのか？

妙なことに巻き込まれたのではないかと、彼の部屋を引つ繰り返す。

あきらかに女が使った歯ブラシ、コロコロに巻き取られた長い頭髮など、こちらの神経を逆撫でするようなものは出てくるのだが肝心なものは何一つ出てこない。

トイレトペーパーの折り目には気付かない男だ。ジーロウが証拠を残さないようにしているとは考えにくい。

本人にも事情がよくわからないままに連れて行かれた可能性が高い。つまり、ヒントすらこの部屋には残されておらず、私がいくら考えても徒労に終わるだけ。

こんなことになるなら、多少無理をしても尾行すれば良かった。  
何かしらの手がかりがこの部屋に残っていると思いついていたのだ。

——あきらめるのはまだ早い。

一度、落ち着いた方がいい。私は一息つくため、紅茶を探した。不  
自然なほどに紅茶缶が並んでいてどれが良いやらさっぱりわからな  
い。

「一番右端の缶がいいね。今日は東洋の香りを楽しむでしょう」

黒い缶を開けようとする私の手が握られる。と思つたら、一瞬で  
くるりと回転させられて唇を奪われた。

「ジーロウ？あなた、今までどこつむぐ」

「この缶は密閉率が高いからね。ゆっくりと優しく開けるんだ。ほ  
ら」

缶が開くと甘い匂いが広がる。嫌味のない良い香りだ。

「ジーロウ、今までどこに？」

「私たち、また付き合うことにしたんですって言われたよ」

「はあ？」

一瞬、何のことかわからなかった。おそらく、例の依頼人のところへ行っていたのだろう。

「彼女、こう左手で髪をいじっていてね。何かこう、僕は違和感を感じたんだよね」

やり直すって依頼主自ら言ってるのなら、何も問題はないはずだ。しかし、私が以前に見た彼女の印象でも、そんなに簡単にやり直せるものではなかったはずだ。

私は背中を抱かれたまま、眉間にしわを寄せる。

「喫茶店にいたんだけどね。わざと会計を彼女に任せるためにお金を渡したんだ。そしたら、やっぱり左手で受け取っていた」

ジーロウは左腕で私を抱いたまま、器用に紅茶を入れている。そういえば、ジーロウの利き手はどっちだったっけ？

紅茶をテーブルに運ぶとジーロウは右のひじについて考える。そういえば、この男はどうやって彼らから逃げ出して来たのだろうか？

あのジーロウそっくりの男。今そこに居るのが、あいつだとしても私には見分ける自信がない。

私もドッペルゲンガーについては一通り調べていた。イメージ・クラウドという研究者が失踪しただけで他に事件らしきものは何も見当たらなかった。

しかし、もし本人が入れ替わっているとしたら――。ドッペルゲンガーが絡むと、事件にならないだけなのではないか？

私は何も気付いていないふりをする。へたに追求しても知らんぷりをされれば、お仕舞いなのだ。何かぼろが出るまで様子を見た方がいい。

「あの女の子がやり直すって言ってるんなら、あえて事を荒立てる必要はないんじゃないかしら？」

彼は紅茶を左手で一口飲み、深いため息をつく。タバコを右手で取り出し、左手で火を点けている。

「それが本人だったらね。でももし、外見が同じなだけで違う人物ならどうだろう？ 僕を拳銃で脅した男を覚えているかい？」

——なるほど。ジーロウらしい。

ぼろが出るというより、出し過ぎだ。自分から疑ってくれと言っているようなものだ。

「あら、覚えているも何も、あなたがその男かもしれないと私は疑っているところよ」

私にはまだ、この男がジーロウだという確証は何一つ掴めてはいない。しかし、私はすでに彼はジーロウなのだとほぼ確信していた。

「あなたがジーロウだという何か、証拠を見せていただけるかしら？」

私は遊び始めていた。というより挑発に近い。私の言葉で、にやりとしたジーロウが私の顔を見て笑う。

「くつくつくつ、さすがはワイルドフラワーだよ。その挑発的な表情まで完璧だよ。僕が両手を交互に使って遊んでいるのに気付いたね」

これで確定。この男は間違いなくジローウだ。いつもながらに緊張感のない悪戯好き。でも、彼がこうでもしないと私は余計に疑っていただろう。

——さて、この悪戯のお仕置きには何をしてあげようかしら？

私が悪魔の笑みを浮かべているにも関わらず、彼は話を元に戻す。

「とにかく原因だけははっきりさせないとね。もし、彼女が入れ替わっているのなら、そこから僕が捕まった理由もわかるかもしれない」

やはり、ジローウは何らかの方法で逃げ出して来たのだ。本人すら、捕まった理由がまだわかっていないと見える。

「で、どうやって逃げ出して来たの？ここに居て大丈夫？」

「失礼だな。この僕が逃げる真似なんかする男だと思っのかい？ちゃんと話し合いで出てきたのさ」

どうせ、女を口説き落とただけだろう。その女が何らかの罰を受けているのではないかと心配だ。

「その女、早く助けてあげないと。何か他に情報は聞き出してないの？」

「よく女性だとわかったね。駄目だったよ。彼女の話聞いてあげるだけで余計な質問をする時間はなかったよ」

余計な質問は彼女の身の上話の方だと思うのだが、まあいい。そういうジローウだから、女が逃してくれたのだ。

「じゃあ、ティータイムも終わったことだし、着替えの用意をしよう。そろそろ次の見張りが来る頃かもしれない」

「あなた、私の部屋に泊まるつもりなの？」

これは意地悪ではない。この私に許しを得るといふ悦びを彼に教えてやるのだ。

しかし、彼は乗って来ない。この部屋は危険だからね、としか言わ

ないのだ。

なぜ、あなたしか頼れる人がいないんです。お願いですから、泊めてください、と泣き付いてくれないのだ？

あなたの寝る場所は座布団一枚だけしかないわよ、いいかしら？というセリフまで用意しているのに。ああ、焦れったくて身悶えしそうだ。

ジーロウをいたぶる千載一遇のこのチャンスをただ逃すのは惜しい。仕方がないので、私から提案する。

「泊めてくださいって、お願いは？」

もしも、断られたらどうしようかと考えると私は泣いてしまいそうになっていた。しかし、ジーロウはすぐさま私の髪を撫で、耳元でつぶやく。

「それなら、後でたっぷりとお願ひしてあげるよ。今は、追っ手が気になって集中できないからね」

——それならそうと、先に言ってくればいいのに。

「さっさと準備するわよ」

今日はとても楽しい夜になりそうではないか。私は嬉々として、着替えの準備を手伝った。

続く

## ディバイド

全く嫌でしようがない。せつかく現世に戻って来たのに、今度は人の目が気になってしまう。

着替えたい。どうしても着物がショッキングピンクなのだ。なぜ、背中にでかかと愛という文字が入れてある？

せめて、パールツクの想雲師匠は離れて歩いて欲しい。早く会社に戻りたいのはやまやまだが、私にはやるべきことがある。

シミズをこの世界へ呼び戻すのだ。師匠が言うには、まだ間に合うらしい。

どうして私が彼を助けようとするのかは自分でもわからない。元はと言えば、彼が悪いからと以前なら知らんぷりをしていたかもしれない。

しかし、彼がああなってしまったのも私に責任があったのではないか？今ではそう考えるようになっていた。

人間の体と人格をウラとオモテの二つに分ける。悪を切り離すと言ってもいい。私が想雲から、教わったことである。

「別れた二つを再びヒトツにするのじゃ。それでシミズを救ってやれるであろつ」

——始めっから切り離さなければ良いではないか。

私は喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。すでに、シミズは二つに分かれているのだ。

どうやって分かれたとか、分かれた理由などはもはや関係あるまい。彼を元に戻すには必要なことには違いない。

「格好の練習材料が見つかったわい。ついて来るのじゃ」

それでピンクの着物で町まで出てきたのだが。

「お、ついに暗やみに入って行きおったわい」

さつきから、ごく普通のカップルを後ろから尾行しているだけなのである。いったい何をしようと言つのか？

それになぜか、私たちと同じカップルを尾行しているもう一組の男女がいる。

——覗きか？いや、そんな雰囲気ではないな。

男は赤いシャツに黒いベストを合わせている。横には通り過ぎる男達が振り向くような色っぽい女を連れている。

尾行には適さない、人目を引く二人だ。お揃いのピンクの着物を着ている私が言えることではないのかもしれないが。

当然、こちらにも気付いているだろう。しかし、声をかけて来るところか、目も合わせようとしめない。まあ、そうだろう。

老人とお揃いの着物を着た女だ。私だってできる限り近付きたくないと考えるに違いない。誰が見ても、正気の沙汰とは思えないからだ。

——ふん、何とも思うが良い。

ああいう男女は一時の感情に流され、すぐに燃え尽きてしまうものだ。私は全然、羨ましくはない。

——早くシミズを助けてやるのだ。それが私の使命。

それにしてもあの男。女を甘やかし過ぎるのではないだろうか？時折、手を引いたり優しい表情を見せて労をねぎらっているのが遠くから見ているだけでもわかる。

顔をうかがわれるのはしゅっちゅうだが、ああいう気の遣われ方を私はされたことがない。

私は、尾行中の標的をそっちのけでベスト男と一緒にいる女が気になって仕方がなかった。

——どうしたら、男性にあんなことをしてもらえるのだろうか？

ポーツと考え事していた私の腕を師匠が掴む。

「ほれ、おいでなさったぞ」

気が付くと、尾行していたカップルが男に襲われていた。しかも、男は彼氏の方に瓜二つだ。

同じ顔をした男が、薄ら笑いで二人の前に立ちふさがっていたのである。

「まずい。刃物を持っておるわ」

想雲師匠はそう言うと同時に駆け出していた。慌てて私も追い掛けたが、出だしであまりにも遅れている。

「助太刀いたそう。下がっておれい」

師匠の手の平がぼんやりと光ったかと思うと、薄ら笑いの抵抗も虚しく男は一瞬で消されてしまっていた。

——なんだ。師匠が片付けてしまったではないか。

安堵よりも、私の見せ場がなかったという落胆の方が大きかった。何もしないのにピンクの着物を着ているのはただのコスプレではないか。

「お爺さん、さっきの人をどこへやったの？」

助けられた女の方が師匠に近寄る。爺さんは年甲斐もなく、顔がゆ

るんでいるのがわかる。

「もう、大丈夫じゃ。しかし、どこかに飛ばしたただじゃからのう。また来るやもしれんわい」

「そうなの？わたし、怖い」

女の子はそのまま師匠に抱きついた。そんなに怖かったのだろうか？後ろから駆け寄っていた彼氏のことなどお構いなした。

黒いベストの男は、少し離れた場所で眉間にしわを寄せていた。何が気に食わないのだろうか？

そもそも、なぜあの男にカップルを見張っている必要があるのだろうか？護衛か何かだと思っていたが、あの態度を見るとそれも違うようだ。

「余計なことしてるんじゃないよ、ジジイ」

抱きついていたはずの女の子が倒れた師匠を蹴り飛ばしている。その場にいた他の誰もが予想外の出来事に凍り付いていた。

師匠はうめき声を上げることなく、そのまま蹴られっぱなしだ。

「おい、君。どういうことだ？何があつたというのかね？」

走り寄る私の声も、彼女には聞こえてはいなかった。止めようとする彼氏にまで殴りかかる勢いだ。

何よりも顔つきがさつきとはまるで別人。何かが乗り移ったとしか思えない豹変ぶりである。

「ハーイ、そこまでだよ、お嬢さん。女の子が暴力はいけないよ」

何時の間にここまで来たのだろうか。黒いベストの男が、師匠を助けようとする私の前に立っていた。

豹変した女が彼の方を向き、殺気立つ。

「ジローウか。私の依頼を失敗させておいて、よくおめおめと現れたものだな。おまえになど用はない。消え失せろ」

「そういうわけにはいけないのさ、マドモアゼル。彼女の依頼は君が邪魔したんだろ？姿が同じなだけで僕が欺けるとでも思ったかい？」

またしても私が置き去りにされている。これは、あれか？いじめというやつではないのだろうか？

「いや、取り込み中すまないんだけどね。その女性は私がなんとかしようじゃないか。君、余計な手出しはしないでくれたまえ」

——私は何を言っているのだ？

ジローウという男にだって、わざわざ乗り込んで来たからには目的がある。私なんて、何をすればいいのかもよくわかっていないのだ。

余計な手出しをしようとしているのは私ではないか？

「あ、いや。やっぱりいい。その老人だけ連れて帰らせてくれ」

私は想雲師匠を抱えるために近づこうとした時だ。女は私の脇腹を蹴りつけ、大笑いをする。

「あっはっはっは。おまえ馬鹿じゃないのか？せっかく、イメージヤを仕留めたんだ。簡単に返すわけがないだろうがよ」

「イメージャ？！イメージャ・クラウドか？」

ジローウが女に飛び掛かって行く。しかし、彼女の動きは並みではなかった。あっさりとジローウをかわし、はじき飛ばす。

私はジローウの手を引っ張って起こした。あの女、只者ではないらしい。ようやく私の出番が来たのだ。

「代わろう。その老人の名前は想雲だと聞いているが、偽名なのか？」

「たぶん、あの娘は裏と表の性格が引っ繰り返っているんだよね。あのおじいちゃんがイメージャ・クラウドだとしたら、何とかできるんだけどね」

話の途中だと言うのに奴が飛び掛かって来る。しかし、私がそれかわすのは造作もないことだった。

——これが私の役目だ。

私の声と身体が二つに分かれていく。私たちは二人同時にジローウ

に振り返り、声をかける。

「この女を二つに分けるのだな。私がなんとかしよう」

ジローウが見守る中、二人の私が武者震いをしていた。

続く

## デビルの試練

想雲という老人は意外と信用できる人物でした。

彼は意識の戻らない晴十郎を見るなり、何度も謝り始めました。なぜ、彼が晴十郎に謝らなければならないのかはわかりません。

しかし、その真摯な態度を見て私は彼を信用することに決めたのです。

「今から、おぬしと晴十郎の心をつなぐぞい。覚悟は良いな？」

彼が言うには、晴十郎を治す方法はただ一つ。閉じてしまっている晴十郎の心を動かすのです。

「これから、何があっても怒りを生んではいかん。晴十郎を治したければな」

どうすれば、我が息子の心が動くのかはわかりません。しかし、じっとしていても何も始まらないのは事実です。

「おぬしには手伝ってもらいたいことがある。デビルに変わった時

に何か呼ばれているような感覚に襲われたことはおありかな？」

どうしてこの方にそんなことがわかるのでしょうか？私は目を見開き、老人をまじまじと観察してしまいました。

「ふおっふおっふおっ、お在りのようすな。リトルとデビルは私のせいで生まれたようなものですから、わかるんですよ」

「え？どういうことでしょう？」

私の問いには答えずに、老人は真っ白な顎ヒゲを手でさすっっていました。

「デビルになつて呼ばれた方向へ向かいなさい。あなたに助けを求める人がいるはずだ」

老人が何者なのか。気にはなりましたが、晴十郎を助けるのが何よりも先です。

我が子を助ける方法がわかった私は一刻も早く動きたかったのです。

「その方を助ければいいのですね？行けば何をすべきかわかるので

しょうか？」

老人は二度頷いて、ほほ笑みました。

「あなたの晴十郎君への想いは必ず届くでしょうな。行けばわかるはずです。さあ、時間がない。早く行っておやりなさい」

そうして私は、瓜二つの人物が対峙しているのを目撃することになったのです。片方は芯が抜かれたようにぐったりと意識を失っていました。

もちろん、何かを言うわけではありませんし、助けを求められたわけではありません。

しかし、私の体は考えるよりも先に動いていました。なぜか、同じ顔をしている人物には渡してはいけないという確信が私にはあったのです。

こうして、私は“空っぽの身体”を二体救いました。男性と女性の一体ずつです。

脱け殻と共に、すぐにまた呼ばれるはずだ。そう確信していた私は二つの体を大事に寝かせておきました。

予感通り、一日を持たずして引つ張られるような感覚がやって来ました。

再び呼ばれた私は、女性の脱け殻を抱えていました。脱け殻もまた、呼ばれている。そんな気がしたからです。

「おい、黒豹。その体をこっちに渡せ」

私の抱えている脱け殻そっくりの女が私に向かって叫びました。ふと振り向くと誰かがその前に倒れています。

私はその人物を見て、私は息が詰まりそうになったのです。

「そ、想雲先生。何があつたのですか？」

老人に答えはありません。辺りを見回すとやたらと人がいるようです。老人と同じ着物を着た女性が二人。

黒いベストに赤いシャツの男。その男に寄り添う女。二人とも似たような眼鏡をかけ、携帯電話でメールをしています。

「おい、聞こえたのか？担いでいる体をこっちに渡せって言っているんだ」

脱け殻とそっくりの女は、ピンクの着物を着た姉妹に襲われています。想雲様と同じ着物です。

やはり、あの女が老人に何かしたのでしょうか？

姉妹が女を捕まえようとはしているのですが、彼女は巧みに逃げ続けています。中国武術のような三人の動きは、目を見張るものがあります。

しかし、ピンクの着物は二人がかりなのです。追い詰めれるのも時間の問題でしょう。

——おかしい。ここに来たのはいいが、何も感じない。

いつもなら、何をすれば良いのか自然とわかるはずなのです。いや、わかると言うより体が勝手に動くような感覚です。

それが、ここにたどり着いた時から、引っ張られるようなあの感覚が消えているのです。

——少し待ってみるか。

「おい、ぼけっとしているんじゃない。こいつを何とかしてくれよ」

何も答えていなかったのが、悪かったのでしょうか？ピンクの着物の女性が突然、私に襲い掛かってきました。

「君は何者なのかね？邪魔をするのなら容赦はしない」

向かって来たのが、一人だったのが幸運でした。次々と繰り出される攻撃もなんとかかわす事ができたのです。

「私はあなたの味方だ。そこに倒れている想雲先生に言われて、ここまでやって来たのです」

「その抱えている女性をどうやって説明するのかな？」

今の私は、黒いベルベットのような毛で覆われています。晴十郎の悪意を吸い込んだデビルの姿です。

ただでさえ、味方とは思えない出で立ちに意識を失った女を抱えているのです。

信じると言つ方が間違っているのかもしれませんが。

説明して納得してもらえなかったら、どうなるのでしょうか？心がつながっている晴十郎に何が起きるかが心配です。

——無抵抗を示して、私が殴られるのは構わない。しかし、体よりもこの晴十郎とつながった心が傷つくことだけは避けなくては。

それしか、無心で耐える方法がないと思った私は覚悟を決めます。

私は丁寧に女の脱け殻を降ろし、ひざまずいて無抵抗を示しました。

これは晴十郎を助けるための単なる通過儀式だと自分に言い聞かせながら——。

深呼吸をし、心を静かに保ちます。すると着物の女性ではなく、赤いシャツの男が歩み寄って来たのです。

「ここは僕に任せてもらおう。彼、何かとつながっているみたいな

んだ。調べさせてもらっよ」

なぜ、そんなことがわかってしまうのでしょうか？私は今からでも逃げるべきなのか考えました。

もし、つながっている晴十郎に何かされでもしたら――。

「おっと。動いてはいけないよ。君のシステムにはアクセス済みだ。つながっているのは大事な人だね？」

「私はどうなっても構わない。どうか、その相手だけには手を出さないでくれ」

携帯電話を操作しながら歩いて来る男に懇願している間、私はただ晴十郎の無事だけを願っていたのでした。

続く

## テクニシャン・ジーロウ

やっぱり、いつだって頼りになるのは女性なんだね。

僕の依頼主は、心を失っている、と言うより奪われてしまったようだ。琴美というレディが二人になって、今それを取り返そうと奮闘してくれているのだ。

どうやっているのかはわからないけれど、彼女は二人に分かれて行動できるらしい。

忍者映画では分身の術はもはや定番だから、見飽きているけれど、実際に見るのは僕も初めてだ。

もしかしたら、大きな力エルも出せるのかもしれないね。でも、僕は力エルが嫌いで忍者になるのは諦めたタイプだから、できれば出して欲しくはないよね。

それに比べて、彼。大きな黒ネコのような姿は見ていて惚れぼれするね。

何かに操られているのか、つながっているのかはつきりしないけど、彼もついでに助けてあげようと思う。

つながっている誰かを必死にかばっているようだけど、彼は何か勘違いしているようだ。

僕には見えている。以前に僕が仕掛けたログインシステムが、動かないガールについている。

黒ネコ氏にも、古いバージョンの感情送信システム“ハートフル”が付けられているのね。

別れさせ屋は、それに関してのプロだから当然だ。自分でカスタムしたこのメガネをかければ、一目瞭然さ。

でも、それがわかっただけではまだ何の役にも立っていない。さて、どうしたもんか？

琴美嬢が明らかにスタミナ切れを始めている。しかし、一時撤退というのも有り得ない。今、ガールが元に戻れなければ、黒ネコ氏も時間的にアウトだろう。

このままでは、僕たちが全面的に敗北してしまうのだ。それだけは避けなくては――。

「おじさん、その繋がっている子のためなら何でも出来るかい？」

僕は黒ネコ氏にそう話し掛ける。

「ああ、約束しよう。私はこの子の無事を保証してくれるのなら、なんだってする覚悟はある」

僕は高らかに笑い、黒ネコに無茶だとわかっている提案を試してみる。

「じゃあ、そこに寝ている人形。首をひねってみてよ」

僕がそう言った時の皆はとて面白い表情を見せてくれたよ。何も言わなくても、この男は何を言いだすんだ？と聞こえてくるかのようだったね。

「そ、それは人形じゃないんだ。今は気を失っているだけでちゃんと心臓も動いている」

黒ネコはだいぶまじめな性格らしい。この身体は生きていると顔を強ばらせて、なんとか僕に思い止まらせようとしてくれている。

「わかつているさ。だから、今のうちに息の根を止めてもらいたいんだよ」

僕は本気だと、わかつてもらわないといけないのさ。特に、ガールそっくりのウラガエシはね。

それを聞いていた彼女が琴美嬢を指差して、僕に叫ぶ。

「ジーロウ、おまえ頭がどうかしちゃったのか？この女があたしを捕まえれば、それは元に戻るんだぞ」

まったく、良い慌てっぷりだ。でも、まだ琴美嬢に隙を見せてはいないのはさすがだと言えるね。

「僕はこの子の依頼を失敗したんだ。証拠隠滅のチャンスじゃないか。それに琴美さんには悪いが、君は一生捕まえられないよ。それを待つほど、僕はのんびりしてられないのさ」

僕は、手の平で黒ネコ氏に、さあ、とうながす。

「ウラガエシのおまえがこの身体を手に入れば、より力を得るのはわかっている。そうなるよりはましってわけさ」

黒ネコ氏が歩き出したと同時に、彼女は琴美嬢を振り切る。

「やめる。それはあたしの体だ」

彼女が一直線に向かって来る。これじゃ、まるで僕たちが悪役みたいだけど、これはこれで面白いよね。

脱け殻となったガールを守ろうと勢い良く走って来たウラガエシが何かにぶつかった。

「ログインパ スWORDを入れてください」

彼女がぶつかったのはガールの見えない壁。さらに、ウラガエシの素早かった動きが突然スローモーションに変わる。

「あ、その周辺はウイルスチェック中だから“重い”かもね。気を付けるんだよ」

何が起こった？ どうすれば、抜け出せる？ 誰の仕業だ？ 彼女の思考が増えれば増えるほど動きは鈍くなっていくようになる。

「ぐぬう。おまえ——」

琴美嬢はその隙を逃さなかった。多少、動きが遅くなっても一つの物事に集中している彼女が負けるはずはない。

ウラガエシの両手を片方ずつ、二人で持って奪われた心をひっぺがす。

黒ネコ氏には何が起こっているのかわからないんだろうね。僕は、立ち尽くす彼の肩に軽く手を置く。

「協力ありがとう、おじさん。あなたのさっきの想いはちゃんと送信されているはずだ」

黒ネコ氏に付けられていたのは、ハートフルシステム。元々は、お互いがすれ違うようになってしまった夫婦の絆を修復するために作られたものだ。

だから、怒りや憎しみといったネガティブな感情は送信されない。黒ネコ氏のように感情を殺しているよりは、少しでも相手のことを考えた方が良いつてことさ。

特に重大な選択を迫られると、どうやって考える。本来は大事

な人と、他人の命を天秤にかけられるようなことは出来ないけど、追い詰められるとね――。

相手の大切さを改めて思い知ることになるんだ。自分が罪を背負ってでも助けたい人っているんだよね。

少し騙したようで申し訳ないけど、なんか期限時間があと少しだったようだから仕方がなかったんだよ。

今、彼は放心しているようだから、後でゆっくり説明させてもらう。僕も彼に聞きたいことがいくつかあるしね。

ウラガエシも捕まえることが出来たし、一石二鳥。彼女からは、僕そっくりの男のことも聞かなくてはいけない。

どういう経緯で彼らは現れたのか？僕を捕まえて、何をするつもりだったのか？

ウラガエシが本体の魂だけでなく身体までも取り込めば、身体能力が飛躍的に向上するのはわかっている。しかし、それが何になる？

――まさかとは思うが、ウラガオモテを喰い尽くそうとでもしているのか？

「あ、ジローウさん。この間はありがとうございました。今度、改めてお礼をさせていただきますね」

心を取り戻したガールが目を覚ましたようだ。やけに好意的なガールの態度が気に障ったのか、ワイルドフラワーの視線が背中をえぐるように突き刺さったよ。

スパイス程度の嫉妬は、恋には必要不可欠だ。そして、人生に情熱を持つためには恋もまた必要不可欠。ワイルドフラワーもよくわかってきているみたいだよ。

「ジローウ、行くわよ。そっち側にはもう用はないでしょ？あの捕まえた方のそっくりさんに色々聞かないと」

「待つて。まだ終わっていないわ」

そこにはナイフを握り締めたレディが立っていたんだ。

「そんなものは早いとこ、しまっておいた方がいいね、お嬢さん。いったい、何が終わっていないと言っのかな？」

彼女はあっさりとナイフを僕に差し出した。そして、ガールを指差して言ったんだ。

「私の名前は楓。あのウラが動けない内に、その子に背中から心臓を刺すよと言ってもらえる？それでウラは消滅するわ」

正直言つて、驚いたよ。いくら女の子の頼みでも、素直に聞けない場合もあるんだね。

普通、心臓を刺されたら人は死んでしまうからね。いくら、悪人と言えども、殺してはいけないと思うわけだよ。

しかし、楓というレディには張り詰めた空気が漂っている。どうやら、だいぶ焦っているらしい。

「まずはそのカフェでティータイムはどうだい？話せば分かり合えることだってあると思うんだ」

「あなたが信用できないって言うのなら、それでも構わない。でも、手は出さないで。邪魔をするのなら容赦しないわよ」

手を出さないで。なんて素敵な言葉だろう。

僕の頭は、すでにどうすれば手を出せるのかを考え始めていた。

続く

## ピースメーカー・ヨイン

「ログインパスワードを入力してください」

これで何度目の表示になるのだろうか？パスワード入力を失敗してもロックがかかるだけで、2時間ほど経てばまた入力ができるようになっている。

時間稼ぎに慌てて作ったシステムにしては良く考えられている。単なるロックだけなら、堂々と破壊できるだろう。

しかし、相手は女性なのだ。無理矢理こじ開けるなど、できるはずもない。後に何が起こるか考えただけでも、リスクが大きすぎる。

——このシステムを僕に仕掛けたのがもし奴らだとしたら。

当たり前だが、商品名や会社の電話番号は表示されていない。独自に開発されたものだ。

——奴ら、こんなものまで作れるようになっていたのか？いや、こんな技術よりもこっちの動きを読まれていることの方がよっぽど脅威だ。

僕には犯人の心当たりがあった。しかし、奴らは放っておけば勝手に消滅するはずではなかったのか？

僕はこれまでにたくさんの悪意を切り取って来た。悪徳政治家、武器密輸商人、戦争を影で支配しようとする権力者まで。

ありとあらゆる戦争を止めるため、少しでも悲しみの涙を減らすために、僕は脇目も振らずに働いた。

ピースメーカーとしての使命に僕は燃えていたのだ。少しぐらいの不具合なら後で解決すればいい。

戦争をなくすこと以上に優先すべきことはないはずだ。自分の欲求しか考えていない悪意なのだ。どうせ切り離して放置しているだけで死滅するだろう。

そう自分に言い聞かせ、とにかく前に進んだ。しかし、事はそんなにうまくは運ばなかったのだ。

——やはり悪意だけを切り取っても根本的な解決にはならないのか？どうすれば、奴らを完全に消滅させることが出来る？

おそらくは連携して、管理下から脱出。少数だろうが、何体かで組織が出来上がっているに違いない。

——基本的に協力することを知らないはずだ。奴らの欲を満たし、誘導できるだけの指導者がいるに違いない。

「ヨインさん、そんなに青い顔してどしたか？」

隣でターニヤが目を覚ましていた。僕の顔を覗き込んで、手を握ろうとする。

「ログインパスワードを入力してください」

「これ、本当にイライラがするよ。ヨインさん、もう十分頑張たよ」

そう言うとターニヤは、壁の一点を睨むと急にベッドから降りる。何をするのかと見守っていると、そのまま激しくドアを開いて部屋から出て行ってしまった。

僕は一部始終をただ呆然と見ていたが、ターニヤが出ていった後、つい吹き出し笑いをしてしまった。

——考え過ぎだったか。どうやら仕掛けた人物は他にいるらしい。

あの性格のターニヤが、僕に何も聞こうとしない。彼女の怒りの矛先がある方向を差している。彼女は、誰の仕業なのか知っているのだ。

——やれやれ。まだ試されているのか？

戻って来たターニヤの機嫌は戻っていた、ように見えた。

「ターニヤ、朝ご飯は何かいいかな？ ママーニヤさんにも聞いて来よう」

「ヨインさん、逃げた方が良いよ。あの女、何するか分かったもんじゃないね」

ターニヤは唇と拳を固く結んで、立ち尽くしている。きっと、ママーニヤに何か言われたのだろう。

「ターニヤ、君が心配しているようなことは起こらないから大丈夫だよ」

「どうしてか？パパーニヤもママーニヤに利用されてたね。コロリと逝ててもおかしくなかつたよ。ヨインさんも殺されてしまうよ」

ターニヤはそう言うつと堰が切れたように泣きだしてしまった。僕と生き別れるか死別するか。ターニヤにとっては、取り乱してしまうほどの辛い選択なのだ。

いくら親と言えども、ターニヤを泣かせる人間は許せない。我が子を自分の所有物として見ているとしか思えないのだ。

「僕はどこにも行かないし、死ぬこともないよ。僕を信じて欲しい。パパーニヤと少し話ができるかな？」

「どうしてパパーニヤか？ヨインさん、帰らないならママーニヤがこれを読むと良い言だな」

僕は渡された封筒を開けると手紙を読んだ。

——やっぱり、そういうことか。しょうがない人だな。

一時間と経たない間にも、僕は朝食の用意に取り掛かっていた。生のアスパラを使ったりゾットだ。パルメザンチーズの香りが食欲をそそる。

部屋に入ると、三人の親子と僕しかいなかった。向こうも手っ取り早く済ませたいのだろう。

僕が、サーモンのマリネとじゃがいものポタージュスープを並べている間にもパパーニヤが話し始める。

「で。話とは何だね、ヨイン君？」

しょっぱなから威圧感を出した態度に僕はむっとする。何か言おうものなら、切り捨ててやると言わんばかりに横に大剣が立て掛けている。

「あなたは僕を見くびり過ぎましたね」

「何が言いたいのかね？」

言うと同時に、椅子をずらすパパーニヤ。抜き身の大剣がきらりと光ったような気がした。

「ヒュージニアよりも優位になったこの国は、僕の功績も認める必要があるということです」

それを聞いたパパーニヤはにたりと笑い、首の骨を鳴らす。

「だがな。君に何かしてくれと頼んだ覚えはないのだよ。ターニヤを嫁にやる約束もしたわけではないしな。それに、我が国が結束したのは私の力によるもの……」

「強欲だな」

パパーニヤは大剣をつかみ、立ち上がった。

「ターニヤに免じて、命だけは助けてやろうと思ったがそれもいらんらしいな」

二人ともやめてくださいよ、というターニヤの声が聞こえた時にはもう、僕は切り付けられていた。

「ログインパスワードを入力してください」

王と大剣は、僕の直前で止まったまま動いていない。

「何？どうしておまえが？」

僕は愛用の棒付き吸盤を取り出すと王に張り付ける。そのままひっぱると彼の悪意が引きずり出された。

「これ位のシステムなら、僕にも作れるんですよ。これでいいですか、ママーニヤさん？」

「お見事ですわ。ああなったら、誰の言うことも聞かないんですもの。パパーニヤにも良い薬になりましたわ」

丸い目をしているターニヤが倒れたパパーニヤを覗き込んでいる。

「悪意を切り取ったから、しばらくは目覚めないよ。起きた時には、元のパパーニヤに戻っているからもう安心だよ」

今度はママーニヤが目を丸くして、そんなことまでしていただいたのねとパパーニヤを覗き込んだ。

「ママーニヤ、ヨインさんを利用してたよ。怒てないか？」

僕はターニヤの肩に手を置き、首を振る。

「ママーニヤさんは、僕にチャンスくれたんだ。何も怒ることな  
んかないよ」

「でも、ケコンはダメだけど、頑張てもらえばいいって言てたよ。最  
初からだよ」

僕はにやりと笑い、ターニヤを見つめる。

「それを知ってたターニヤも同罪じゃないのか？ パパーニヤの手前、  
ママーニヤがそう言うしかなかったのはターニヤも気付いていたん  
だろ？」

突然、ママーニヤはターニヤの脇腹をくすぐりにかかる。

「良かったわね、いい旦那さんが出来て」

「うひゃお。 やめるよ、ママーニヤ。こそばゆいのことだよ」

僕は、笑顔で追い掛け合う親子を見守りながら、休暇明けのことを  
考えていた。

——さて。悪意の処理方法を考えないとな。

ヨイン編END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8551k/>

---

エキセントリック連続ワールド

2010年10月20日09時21分発行